大妻女子大学紀要―文系―　第四十三号、平成二十三（二〇一一）年三月

ちりめん本研究

―解題・翻訳　松室八千三版『昔噺』―

榎本千賀

一、はじめに

従来、ちりめん本といえば、東京の長谷川武次郎（長谷川弘文社）版『日本昔噺』に主眼が置かれてきた。石澤小枝子氏の『明治の欧文挿絵本ちりめん本のすべて』では、長谷川版も含めたちりめん本について詳細な言及がある。[1] また、宮尾與男氏編『明治期の彩色縮緬絵本対訳日本昔噺集』では、長谷川版の英語版のカラー図版と翻訳を掲載している。[2] しかしながら、長谷川版以外のちりめん本については、それほど注目されてこなかった。今回、取り上げるちりめん本は、大阪で出版された松室八千三版と称されるものである。松室八千三は、明治三三年（一九〇〇）、林弘之を著作者、石塚書店（石塚商店）を発行所、矢野松吉を印刷社として、英語版のちりめん本『昔噺』一〇冊揃いを出版した。奥付によると、この時、松室八千三の住まいは、大阪市東区横堀四丁目番外九番邸である。矢野松吉は、大阪製本印刷株式会社代表者を務め、大阪市西区阿波座一番町六十番邸にあった。石塚書店（石塚商店）は、大阪市東区安土町四丁目三十番邸である。ちりめん本の定価は、一冊、弐拾銭である。

この松室八千三版『昔噺』の先行研究には、中野幸一氏の「上方版チリメン本の日本昔噺」[3]や、石澤小枝子氏の『明治の欧文挿絵本ちりめん本のすべて』[4]、京都外国語大学の『文明開化期のちりめん本と浮世絵』[5]があるが、単発で終わったこと、英文の稚拙さ、スペルに間違いが多いこと、ちりめん紙の粗雑さから、それほど高い評価を得てこなかった。長谷川版のちりめん本『日本昔噺』は、明治一八年（一八八五）から昭和三〇年代（一九五五～一九六四）まで刊行され続けた。英語版以外にも、フランス語版、ドイツ語版、ポルトガル語版などがあり、外国人のお土産として珍重された。ただ、石澤小枝子氏の指摘にもあるように、刊行当初は、ちりめん本の形態を取らず、日本人のテキストとしても出版されている。[6] これに対して、松室八千三版『昔噺』は、外国人向けのちりめん本から日本人向けの洋装本へと方向転換していく。つまり、長谷川版と松室版は、ターゲットを変え、異なる道を歩んでいくのである。この両者の転換には、興味深いものがある。拙稿において、松室八千三版『昔噺』の特色、松室版と長谷川武次郎や巌谷小波との比較、松室版『昔噺』の挿絵を担当した絵師、松室版『昔噺』が出版された時代背景に迫ったが、[7] 翻訳を載せることができなかった。松室八千三版のちりめん本研究がそれほど進んでいない現状において、松室版『昔噺』の英文の翻訳を掲載することは、今後のちりめん本研究において、非常に意義のあることと考える。そこ

で、本稿では、松室版『昔噺』の全文の翻訳と、架蔵本の表紙を掲載し、考察を加えることとする。

二、書誌・解説

松室八千三版『昔噺』は、「浦島太郎」「桃太郎」「昔噺瘤取」「昔噺勝々山」「昔噺花咲爺」「昔噺舌切雀」「昔噺猿蟹合戦」「昔噺文福茶釜」「昔噺金太郎」「松山鏡」の一〇冊揃いである。現段階で判明している一〇冊揃いの所蔵先は、大阪府立中央図書館国際児童文学館・京都外国語大学図書館・架蔵である。なお、大阪府立中央図書館国際児童文学館蔵本には、ボール紙の外箱が付いている。外箱の側面には、「THE STORY OF NIPPON」の文字とともに、「日本一」の旗を背に、日の丸の扇子を持つ桃太郎、鬼や翁の面、鉞、蟹のハサミなど昔話に関連する絵を印刷した紙が貼られている。この外箱は、大阪府立中央図書館国際児童文学館でのみ確認が取れないため、推測の域を出ないが、もとの箱の可能性が高い。装幀は、各冊縦一三・八センチ×横九・五センチ内外。袋綴。表紙は、色刷りの転写石版による縮印本。色が付いた表紙半葉を、袋綴にしている一丁の片面に貼り込んでいる。特筆すべきは、松室八千三版『昔噺』の一つ「昔噺金太郎」の奥付一丁を紙背文書にし、その上に、半丁の色刷りの石版の表紙を貼付し、飾り紐を掛けていることである。この奥付の再利用は、「浦島太郎」、「桃太郎」、「昔噺勝々山」、「松山鏡」の四冊のみである。挿絵は、各冊五枚に統一されている。挿絵は、すべてではないが、浮世絵師月岡芳年の門人稲野年恒と、年恒の門人川上（赤井）恒茂が担当している。また、頁数が付けられているのが特徴である。

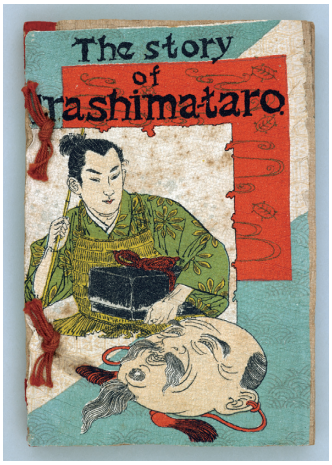
以下、各昔話の英文タイトル、印刷、発行年月日、発行所、絵師などを掲げておく。なお、英文タイトルには、綴りの間違いがあるものもあるが、そのままとした。

「浦島太郎」
The Story of Urashima-taro.
（内題　THE STORY OF URASHIMA-TARO）
本文一九丁半、三九頁。
明治三三年三月一日印刷、三月五日発行。
発売所　石塚書店。
京都外国語大学蔵本・架蔵本とも、表紙の紙背文書に「昔噺金太郎」の奥付を使用。
京都外国語大学蔵本は、二三・二四頁を欠く。代わりに、その部分に一一・一二頁が入る。
絵師　川上恒茂。すべての挿絵ではないが、三七頁に「恒茂画」の署名がある。

「桃太郎」
THE STORY of MOMOTARO.
（内題　THE STORY OF MOMOTARO.）
本文一七丁、三四頁。
明治三三年三月一日印刷、三月五日発行。
発売所　石塚書店。
京都外国語大学蔵本・架蔵本とも、表紙の紙背文書に「昔噺金太郎」の奥付を使用。
絵師不明。

「昔噺瘤取」
The Story of a Wen Taker
（内題　THE OLD STORY OF A WEN TAKER.）
本文一七丁、三四頁。
明治三三年三月一日印刷、三月五日発行。
発売所　石塚書店。
絵師不明。

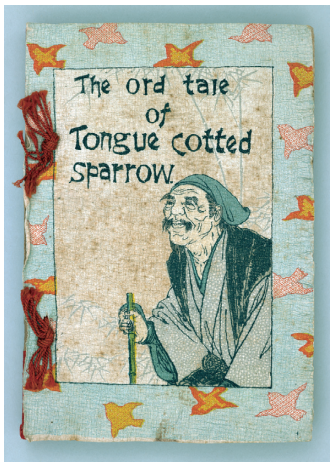
昔噺瘤取



浦島太郎

昔噺勝々山

桃太郎

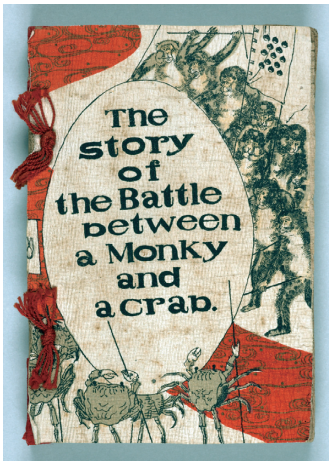


昔噺花咲爺

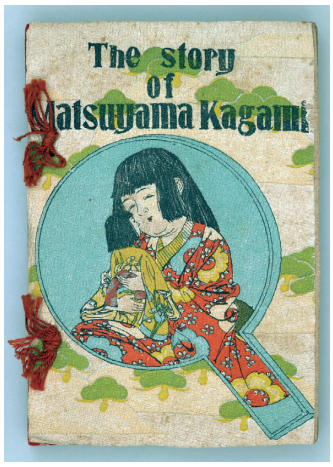
昔噺文福茶釜

昔噺舌切雀

昔噺金太郎



昔噺猿蟹合戦



松山鏡

「昔噺勝々山」
The Story of the Kachi-kachi Mountain.
（内題　THE STORY OF THE KACHI KACHI MOUNTAIN.）
本文一六丁半、三三頁。
明治三三年三月八日印刷、三月一二日発行。
発売所　石塚書店。
京都外国語大学蔵本・架蔵本とも、表紙の紙背文書に「昔噺金太郎」の奥付を使用。
絵師不明。

「昔噺花咲爺」
The Story of Hana Sakashi jiji.
（内題　THE STORY OF HANA SAKASHI JIJI.）
本文二〇丁、四〇頁。
明治三三年三月二〇日印刷、三月二五日発行。
発売所　石塚商店。
絵師　川上恒茂。すべての挿絵ではないが、三四頁に「恒茂画」の署名がある。

「昔噺舌切雀」
The Ord tale of Tongue Cotted Sparrow.
（内題　THE OLD TALES of THE TONGUE CUTTED SPARROW.）
本文一七丁、三四頁。
明治三三年三月二〇日印刷、三月二五日発行。
発売所　石塚商店。
絵師　稲野年恒。すべての挿絵ではないが、三一頁に「年恒筆」の署名がある。
三四頁が、四三頁に、ふり間違えられている

「昔噺猿蟹合戦」
The Story of the Battle between a Monky and a Crab.
（内題　THE STORY OF THE BATTLE BETWEEN A MONKEY AND A CRAB.）
本文二一丁、四二頁。
明治三三年三月二〇日印刷、三月二五日発行。
発売所　石塚商店。
絵師　稲野年恒。すべての挿絵ではないが、四二頁に「應需年恒筆」の署名がある。

「昔噺文福茶釜」
The Old tale of Bubuku Chagama.
（内題　THE OLD TALE OF BUNBUKU CHAGAMA.）
本文一八丁、三四頁。
明治三三年三月三月二五日印刷、三月二〇（ママ）日発行。
発売所　石塚書店。
絵師　川上恒茂　すべての挿絵ではないが、三〇頁に「恒茂」の署名がある。

「昔噺金太郎」
The Story of Kintaro.
（内題　THE STORY OF KINTARO.）
本文一六丁半、三三頁。
明治三三年三月三月二六日印刷、三月三〇日発行。
奥付に二〇頁という頁数が入る。
発売所　石塚商店。
絵師　川上恒茂。すべての挿絵ではないが、三〇頁に「恒茂画」の署名がある。

「松山鏡」
The Story of Matsuyama Kagami.
（内題　THE STORY OF MATSZ YAMA KACAMI.）
本文一七丁半、三五頁。
明治三三年三月二六日印刷、三月三〇日発行。
発売所　石塚商店。
京都外国語大学蔵本・架蔵本とも、表紙の紙背文書に「昔噺金太郎」の奥付を使用。
絵師　川上恒茂。すべての挿絵ではないが、三三頁に「恒茂」の署名がある。
大阪府立中央図書館国際児童文学館蔵本・京都外国語大学蔵本・架蔵本とも、三五頁の頁数を欠く。

三、松室八千三版『昔噺』の翻訳

松室八千三版『昔噺』のそれぞれの昔話の翻訳を掲げる。日本人の林弘之が英文を作成したため、英語の間違いが多い、文法がかみ合わない、遠回しな表現を使うことがあり、ぎこちない点がある。この翻訳では、それらを踏まえた上で、忠実に翻訳した。

浦島太郎

昔々、丹波郡の水の江に浦島太郎という名の漁師がいました。彼は、普通の漁師と違ってとても優しい心の持ち主でした。二五歳の彼はある日、夕暮れの時に海岸を歩いていました。そこで、八歳から一二歳くらいの子供たちが大声ではしゃぎながら遊んでいるのを見つけました。しかし、子供たちに近づいてみると、浦島太郎は状況を理解しました。子供たちは一匹の亀を捕まえ、長い間遊んだ後、ひどくいじめていたのです。これを見た優しい浦島太郎は、耐えられず、「やあ、坊やたち。そんなひどいことをしてはいかんぞ。亀が死んでしまうじゃないか。よい子なら亀を逃がしてやりなさい」と言いました。しかし子供たちは浦島太郎の言うことを聞こうとはせず、「嫌だね、この程度では死にはしないぞ。こいつをひっくり返すと、もがくのが面白いぞ」と言い、止めませんでした。

これを聞いた浦島太郎は、亀を助けるために子供たちから買うのが一番の方法だと考えました。「君たち亀を放してやらないのだね。その亀をお金と交換しないか。そうしたら君たちは、そのお金で好きな物を買えるじゃないか。ほら、見てごらん。お金ならこれだけあるぞ」と言い、子供たちに自分の財布を見せました。これを見た子供たちは、少し相談した後、亀を売ることにしました。太郎は喜び、お金をやりました。お金をもらった子供たちは、すぐさま、その場からいなくなりました。

弱った亀の背中をやさしく叩いた浦島太郎は、「かわいそうに、私が助けてなかったらもう少しで死ぬところだったぞ。さあ、おまえは、もう自由の身だ。誰かに捕まらないうちに、早く海へ帰りなさい」と言いました。それから、浦島太郎は、亀を持ち上げ、海へと帰したのです。安心した浦島太郎は、よいことをしたと思い、その後、ゆっくりと家へと帰りました。

次の朝、浦島太郎は目を覚ますと、いつものように船に乗って漁をするため、海へと出かけていったのです。とても遠くまで船を出し、漁を始めました。数分後、誰かが自分の名前を呼ぶ声が聞こえたのです。この海に人がいるはずがないと不思議に思った浦島太郎は、船の周りを注意深く見渡しました。すると、昨日、危ないところを助けてやった亀がそこにいたのです。「やあ、亀さん、また、おまえに出会えるとは。おまえが私の名前を呼んだのかね」と尋ねると、亀は、「そうです。昨日私を助けてくれたお礼を言いに来たのです」。すると、浦島太郎は、「礼儀正しいやつだな。さあ、こちらに上がって日に当たりなさい」と言いました。亀は喜んで船に上がり、日に暖まりながら再び話を続けました。「あなたは竜宮城を見たことがありますか」。浦島太

郎は、「見たことはないよ。それに、ここからとても遠いから行けないよ」と返しました。亀は、「行ってみたくないですか。それならあなたを私の背中に乗せて案内します」と言いました。これを聞いた浦島太郎は笑いながら、「おまえの背中は小さすぎて私には乗れません」と言いました。しかし、亀はにっこりして、「そんなことはありません。とても大きな人でも乗ることができます。ちょっと待っていてください」と言い、水の中へと消えて行ったのです。そして数分後、亀は大きくなって帰ってきたのです。驚いた浦島太郎は、「どうやって大きくなったのだ。それなら、私だっておまえの背中に乗ることができるじゃないか。それならば行かせてもらおう」と言い、つり竿だけを持って亀の背中に乗りました。亀は、荒波を越えて竜宮へと泳ぎました。何マイルも進んでいくと、とても立派な門が見えてきました。その門の先には、たくさんの宮殿と神殿が輝いていました。

浦島太郎は、目の前の素晴らしい光景を見て感激しました。「あれは何ですか」と聞くと、亀は、「前にあるのが竜宮の門です。そして、その中の建物が竜宮の宮殿と神殿です。素晴らしいでしょう。私たちは、間もなくそこに着くのですよ」と答えました。彼らは話をしているうちに、門に到着しました。「さあ、竜宮に着きました。中には濠がたくさんありますが、ぬれることなく宮殿に着けます。門の中では土が乾いているのです」。浦島太郎は納得し、期待を膨らませました。門に到着すると、亀は、「おーい、番人さん。門を開けてください」と呼びかけました。すると、中から番人が出てきて、「誰だ」と問いました。亀は、「私は海の神の家来です。日本から浦島太郎という珍しい来客に、竜宮を見せるために連れてきました」と言いました。すると、王様が、召使いに来客を出迎えるよう命令しました。そして、亀と浦島太郎は中へと案内されたのです。

漁師である浦島太郎は、これほど豪華な場所を見たことがありませんでした。居間へ到着すると、乙姫に歓待されました。乙姫はとても美しい女性で、たくさんの美女に囲まれていました。浦島太郎は、乙姫のあまりの美しさに緊張しながらお辞儀をしました。すると、乙姫は浦島太郎の手を取り、奥の部屋へと案内しました。「あなたに会えて光栄です。私の家来の亀を助けてくれたことに深く感謝しています。どうか共に食事をしませんか。どうぞ、おくつろぎください」と聞かれた浦島太郎が、「これほどの歓迎をなさってくださり、感謝しております」と言っているうちに、夕食の準備が整いました。早速、着席し、料理を楽しみました。

しばらくすると、召使いたちは、踊ったり、歌ったりして浦島太郎を喜ばせました。これほどの贅沢な時間を過ごすのは初めてであり、大いに楽しみました。夕食後、浦島太郎は、乙姫に竜宮の周りを案内されました。竜宮の建物は、すべて、高価な真珠とさんごでできており、浦島太郎は、あぜんとして驚きました。

特に、竜宮の不思議な庭園に感激しました。そこには、四季の景色がいっせいに楽しめたのです。東を向くと春、南を向くと夏、西を向くと秋、そして北を向くと冬景色。浦島太郎は、不思議に思いながら美しい景色を眺めました。

浦島太郎は、やがて何日も滞在することになり、自分の家などすっかり忘れてしまいました。そして四日目になると、ついに自分の家族のことを思い出し、帰りたいと言うのです。そこで帰り支度をし、すべて済ませて乙姫に帰宅することを告げました。

当初、乙姫は、帰らせようとはしませんでしたが、やがて、あきらめ、浦島太郎を帰らせることにしました。「これ以上、あなたを引き止めません。その代わり、これをあなたに差し上げましょう」と言い、乙姫は、紐で結ばれたとても美しい箱を渡しました。浦島太郎は喜びましたが、これ以上、迷惑をかけたくないと思い、断りました。

しかし、乙姫は、浦島太郎の思いを許さず、箱を渡したのです。感謝の気持ちいっぱいで受け取ると、乙姫は、美しい声でこう言いました。「この箱はあなたの物です。しかし、残念ながら決して開けてはなりません。もし、謝って開けてしまうと、大変なことが起きますよ」。

浦島太郎は中身を聞くと、「この箱は玉手箱といい、とても大事な物が入っています」と、乙姫は言いました。箱を持った浦島太郎は、帰る準備をして、門へと向かいました。そして、世話をしてくれた人に最後のお別れを言い、亀の背中に乗って竜宮を去りました。

亀は、矢のように素早く泳ぎ、あっという間に、もとの海岸へと着きました。亀の背を降りると、浦島太郎は、あることに気づきました。それは、海岸の風景が、がらっと変わっていたのです。見覚えのある人も誰一人おらず、不思議に思った彼は、自分の家へと向かいました。すると、家の様子までもが変わっており、浦島太郎は、理解に苦しみました。「母さん、父さん」と家の中を歩いてみると、そこには別の家族が住んでいました。きっと自分の家族は引っ越したのだと思い、その住人に尋ねました。「すみません。私は浦島太郎といいますが、数日前に旅へ出かけまして、先ほど帰ってきました。私の家族は、他の家に引っ越したのですかね」。しかし、部屋の人は何も答えずに、ただ、浦島太郎を見つめるだけでした。これに腹が立った浦島太郎は、「あなたは一体誰だ」と言いました。「私は、ごんべいです。そして、あなたは浦島太郎」と家族の一人が答えました。「そうだ。私が浦島太郎だ」と答えると、「まさか、冗談じゃない。浦島太郎は、確かにここに住んでいた。しかし、それは七百年前の話だぞ。彼が、この世に生きているわけがないじゃないか。それに、あなたは、とても若いから、誰もあなたの言うことは信じないぞ」と返されました。彼らは、とても真剣な顔でしゃべり、冗談を言っているようではありませんでした。

困った浦島太郎は、家族と会話をして本当のことを聞きました。そして、行くところもなくし、海岸へと向かったのです。この村には知人もおらず、寝泊まりする家もありませんでした。その時、彼は、乙姫からもらった玉手箱のことを思い出しました。中に何が入っているか気になりだし、砂に座ると好奇心から紐を解き始めたのです。箱が開くと不思議なことに、その中から紫色の煙が、三回吹き出してきたのです。顔に煙を浴びた浦島太郎は、なんと老人の姿に変化したのです。

桃太郎

ずっとはるか昔、とても正直なおじいさんとおばあさんが暮らしていました。ある日、おじいさんは山に芝刈りに、おばあさんは川に洗濯に出かけました。籠を持ったおばあさんは、川に着くと、早速、洗濯を始めました。すると、向こうから両手で抱えるほどの大きな桃が流れてきました。桃が好きなおばあさんは、「まあ、なんて大きな桃。これほど大きな桃を見るのは初めてですわ。食べたらきっとおいしいでしょう。おじいさんも桃が好きだから、家に持って帰って、一緒に食べることにしましょう」とうなずき、桃を拾って帰ろうとしますが、手が届きません。何か棒のような物がないか辺りを見回しますが、何も見つかりません。困ったおばあさんは、その頃はやっていたある歌を思い出します。『あっちの水は苦いぞ～、こっちの水は甘いぞ～、苦い水は避けて来い～、甘い水に寄って来い～』と手を叩きながら、嬉しそうに二、三回歌うと、なんと桃が、おばあさんの方へ流れてきて止まったのです。おばあさんは大変喜び、手を伸ばして桃を拾い上げました。そして、洗濯を止めて、家に桃を持ち帰ることにしました。

家に着くと、おじいさんは、まだ、芝刈りから帰っていなかったので、おじいさんの喜ぶ顔を思い、辛抱強く待つことにしました。夕方、斧を杖代わりに使いながら、たくさんの芝を担いだおじいさんが、機嫌よく帰ってきました。この様子を見て、おばあさんは走り寄り、「おじいさん、お帰りが遅かったですね」と、おばあさん。おじいさんが、「何事かあったのかい」と尋ねると、「そうじゃないのです。今日は、おじいさんが喜ぶものを持って帰ってきたのです。それを早く見せたかったのです」と、おばあさん。「それは嬉しい」と、おじいさんは言って、わらじを脱ぎ、足を洗い、家の中に入っていきました。おばあさんは、陽気に桃を抱えて、おじいさんの前に置きました。「見てください、この大きな桃」。おじいさんは、桃の大きさにとても驚き、「こりゃたまげた。なんて大きな桃だ。一体どこで、こんな大きな桃を買ったのじゃ」と言いました。「買ったんじゃありません。拾ったのです」と、

おばあさん。

これを聞いたおじいさんは、驚いた顔をしたので、おばあさんは、洗濯をしていた川での出来事を説明しました。喜んだおじいさんは、台所から包丁を持ってきて、桃を半分に切る準備をしました。そして、大きな桃を台に置き、包丁を桃に載せたその時、なんと桃の中からかわいらしい赤ちゃんの声が聞こえたのです。不思議に思ったおじいさんとおばあさんは、包丁を置いて、そっと耳を傾けました。すると、桃の中から「じいさま、待ってください」という声が聞こえ、桃が二つに割れて、なんともかわいらしい赤ちゃんが、笑いながら姿を現したのです。「ご安心ください。僕は、妖怪でも何でもありません。神様の意思で、天の地から、この地に送られたものです。じいさまとばあさまは、とても正直で、人の使命を果たす者なのに、子供がいないことを神様は哀れに思われ、僕をじいさまとばあさまのもとへ送ったのです。どうか僕をあなた方の子供として引き受けてください」。これを聞いたおじいさんとおばあさんは喜び、「私たちは、長い間、子供もできず、年だけとってしまい、大変悲しい思いをしていました。神様が、こうして子供を私たちに授けてくださったことをとても喜ばしく思い、感謝しています」と答えました。おじいさんとおばあさんは、この子が桃から生まれたので「桃太郎」と名付けました。そして、神様から授けられた子だけあり、勿論、馬鹿でなくて、体に障害もなく、体格のしっかりした勇気のある子でした。筋力も強く、多方面で秀でていました。

時は矢のように過ぎ、桃太郎は、一五歳になりました。すっかり大人になった桃太郎は、ある日、おじいさんに言いました。「私は、じいさまの子になってから、山よりも高く、海よりも深い愛情を受けて育ちました。感謝を表す言葉もありません」と。すると、おじいさんは、「それは言いすぎじゃ。息子をたくましく育てるのが父の義務じゃから、礼は言わんでいい。おまえが大きくなったら、わしの世話をしてくれればいい」と答えました。しかし、桃太郎は、こう尋ねました。「じいさまに一つお願いがあるのです。じいさまの許可で、少しこの家を出て、日本の北東にある鬼たちが住む鬼ヶ島に行きたいのです。この鬼たちは、私たちの政府に従わず様々な罪を犯してきました。私は、彼らを処罰してやっつけたいのです。私は、鬼退治をするために天から送られてきました。前にも言ったように、すべてのことは、桃の中に入っていた時から知っていました。鬼が島に行って鬼を退治して、我々民から奪った宝を取り戻すことが私の望みです」と桃太郎は言いました。

感激しながら桃太郎の話を聞いたおじいさんは、「桃太郎は歳のわりには勇敢だし、天からの贈り物だから、きっとやってくれるだろう」と思いました。「よし、おまえの決心は、素晴らしい。お国のために立ち上がるのは、今が一番。わしも一緒に行ってやりたいが、もう歳だから役に立ちそうにない。行ってよいぞ」。桃太郎は、大いに喜び、早速、準備に取りかかりました。

おじいさんは、桃太郎の決心に喜び、このことをおばあさんに話しました。しかし、おばあさんは、桃太郎を一人で行かせることに最初は抵抗したものの、おじいさんに説得され、了承しました。そして、二人は、桃太郎のために旅先の食料として、きび団子を作ってやりました。準備が整った桃太郎は、年寄りの親に別れを告げました。これほど勇敢な親でも、我が子の旅立ちに、おじいさんとおばあさんは悲しみました。そして、涙ながらにおじいさんは、「どうか気を付けて、怪我をせずに帰ってくるんだぞ」と言いました。そして、おばあさんは、「おまえが鬼を退治して帰ってくるのを待っているから」と言いました。桃太郎は、荷物をまとめて、家を後にしました。おじいさんとおばあさんは、彼方に消えていく桃太郎の姿を屋根の上から、いつまでも見送りました。また、桃太郎も家の屋根が見えなくなるまで何度も振り返りました。

急ぎ足で歩いた桃太郎は、その昼、日陰を見つけ、少し休むことにしました。木の根元に腰を掛け、お腹が空いたので、腰にかけたきび

団子を一つ取り出しました。すると、突然、大きな黒い斑点のある犬が現れました。この犬は、牛くらい大きくて、威嚇するように、桃太郎にこう言いました。「おまえは一体誰だ。おれの縄張りに許可なく通ろうとする無礼者め。おまえが食べているきび団子を全部置いて行かないと、食いちぎるぞ」。しかし、桃太郎は、ちっとも恐れず、あざけるようにこう答えました。「何を言う、この野良犬。私は、鬼退治をするため鬼ヶ島へ向かっているところだ。私の名前は桃太郎。これ以上私の邪魔をしたら、頭からしっぽまで二つに斬ってやる」。これを聞いた犬は、おびえながらしっぽを丸め、体を小さくしながら、こう言いました。「あなたが桃太郎だとは。どうか私の無礼な態度をお許しください。そして、あなたの家来として一緒に鬼ヶ島まで連れていってください」。これを聞いた桃太郎は、「おまえは実に賢い犬だ。そう願うなら一緒に連れて行ってやろう。無礼な態度も許すことにしよう」と返しました。すると、犬は、こう尋ねました。「私の頼みをすぐ了承してくれて幸いです。でも、一つお願いがあります。私は、とてもお腹が空いています。あなたが先ほど食べたきび団子を一つください」。桃太郎は、「よろしい。日本一のきび団子をやろうじゃないか。しかし、半分しかおまえにはやれないぞ」と言い、きび団子を半分だけ犬にやりました。こうして桃太郎は、犬と一緒に山と谷を越え、旅を続けました。

今度は、猿が、木の上から飛び降りてきて、桃太郎の前に膝まずき、言いました。「ようこそ桃太郎様。どうか私を一緒に鬼退治に連れて行ってください」。この猿は、この山に住んでいるもので、きび団子を半分もらい、桃太郎の家来になりました。しかし、犬との相性が悪い猿は、剣を持って桃太郎の後ろを歩き、犬は、旗を掲げて先頭に立ち、桃太郎は、扇を持って二匹の間を歩きました。

とある平地に到着すると、今度は、赤いとさかの色鮮やかな鳥が、桃太郎の足下に飛んできました。雉子でした。すると、犬は、とっさに襲いかかり、けんかが始まりました。しかし、桃太郎は、けんかをすぐ止めさせ、きび団子を雉子に半分やって、家来にさせました。そして、ある日、桃太郎は、犬と猿と雉子を呼び、鬼と戦うには一致団結しないといけないので、けんかをしないよう注意しました。けんかがもう一度おきたら、その者を追放せざるを得ないと命令したのです。

数日後、皆は、東の海岸に到着し、そこから船で鬼ヶ島へと向かいました。鬼ヶ島に近づくと、そこには、とても大きな屋敷が何棟も建っており、島の周りは、頑丈な鉄の柵と、険しい断崖で守られていました。空には鬼の旗が何本も掲げられ、まさに城壁のようでした。桃太郎は、雉子を島に送り込み、鬼を倒しに来たと宣告させました。すると、たくさんの鬼が金棒を手に持って、雉子を追いかけました。しかし、雉子は、身動きが早く、緑の鬼には頭を、赤い鬼には胸を鋭いくちばしでつつきました。鬼たちは驚いて身を引いたその瞬間、犬と猿が鉄の扉を打ち壊し、攻撃に出たのです。前に出る鬼をすべて倒すと、残りの鬼は殺されるのを恐れて、すぐさま降参しました。鬼たちは、あらゆる宝を桃太郎に差し出し、命乞いをしました。桃太郎の家来たちは、宝を全部集め、大手柄になりました。そして、桃太郎たちは、無事、おじいさんとおばあさんのもとへ帰ることができ、皆で桃太郎の勝利を祝いました。

昔噺瘤取

ずっとずっとはるか昔、顔に大きな瘤の付いたおじいさんがいました。おじいさんは、左あごに付いた瘤を気に入らなくて、治そうと医者からもらった薬を塗り続けました。しかし、瘤は、治るどころか、大きくなる一方でした。

ある日、おじいさんは、芝刈りをしに、山へと出かけました。丸一日あちらこちらで作業をした後、夕方になったので、山を下って歩きました。すると、晴れていた天気が突然、悪くなり、雨が降るような様子になりました。

おじいさんが、雨が降ると思った途端、すぐ、降り出したのです。

おじいさんは、仕方なく、木のふもとで見つけた穴の中に入り、雨が止むのを待つことにしました。しかし、雨は、徐々に強くなり、大きい雷と稲妻が鳴り出したのです。怖くなったおじいさんは、手を耳にかぶせ、聞こえなくしようとしました。大体の場合は、にわか雨は、長くは続きません。少し経つと、雷と稲妻と雨はすべて止み、夕日が遠くの丘を光らせていました。辺りは静まったので、おじいさんは、とても嬉しく思いました。穴から出たその時、彼方から大群の人たちの足跡の音が、おじいさんの方向に向かっているのに気づくのです。おじいさんは、芝刈りをしに山へ出かけた別の人たちだと思い、一緒に帰ろうと大きく手を振りました。しかし、彼らは、おじいさんが思っていた人たちとは違いました。

おじいさんの前に現れたのは、鬼や妖怪の大群でした。三つ目と角と裂けた口を持った怪獣や、熊の皮を着た赤い鬼と虎の皮を着た青い鬼などがいました。両方は、手に金棒とたいまつを持ちながら、おじいさんの方へと歩いて行ったのです。驚いたおじいさんは、あまりもの恐怖に転んでしまいました。しかし、運よく見つからず、再び穴に戻って、彼らが通り過ぎるのを待つことにしました。すると、鬼たちは、おじいさんが隠れていた木の前に立ち止まり、何かをしだしたのです。木の穴に閉じこもったおじいさんは、何もすることができず、じっと待ちました。お腹も空き始め、蟻にも攻撃され、いつもお辞儀を捧げていた神様にまじめに祈ることにしました。

その間、外の雰囲気は、にぎやかになり始め、歌と踊りの音がおじいさんに聞こえました。たくさんの鬼と怪獣たちは、頭と思われる鬼の周りで、楽しく歌ったり、踊ったりして盛大なお祭りをやり出したのです。おじいさんは、これを見て驚きました。自分も踊りと歌が得意とのことで、恐怖を忘れて、穴から出てきたのです。楽しい仲間を見つけたことに嬉しく思い、自分にこう言いました。「長年、この山を歩いてきたけれど、これほど異様な人たちを見かけるのが初めてじゃ。一緒に酒を飲んで、仲間に入れたらいいな」。

おじいさんが楽しい祭りを見ていたら、頭の鬼が、酒の入った大きな器を手に持って踊っている鬼たちに、こう言いました。「もう、おまえらの踊りには飽きた。手の動きが、いつも一緒だ。新しいやつの踊りが見たい」。

おじいさんは、これを聞いて、鬼たちの前に姿を現して、自分の踊りを披露したいと思いました。しかし、おじいさんは、ためらいました。なぜなら、鬼や怪獣たちの大きな口で食べられるかもしれないからです。でも、もし上手に踊って気に入られたら、食べられずに済むと考え、おじいさんは、一生懸命踊りながら自分の姿を鬼たちの前に現したのです。

頭の鬼は、突然、目の前におじいさんが現れたことに驚きました。そして、おじいさんの踊りに感激し、皆は、おじいさんの踊りを讃えました。一匹の鬼は、「なんて上手なのか。きっと、たくさん、お金を払って習ったのだろう」と言いました。別の鬼は、「なんとも美しい踊りだ」と言いました。鬼たちは、皆、おじいさんの踊りに感心しました。そして、頭の鬼は特に魅了され、こう言いました。「おまえの踊りに感心したよ。これほどおもしろい踊りは見たことがなかったね。酒はいかがかね」。おじいさんは、おどおどして器を受け取り、こう言いました。「あなたたちの宴会は、とてもにぎやかで、私も参加したくなりました。無礼な態度なのに怒られなくて済んだし、おまけに踊りを褒めてもらったことで、とても嬉しいです」。鬼頭は、笑いながらこう言いました。「全く無礼などではない。とても喜ばせてもらったよ。明日から毎日、うちらと一緒に楽しんで、踊りを見せてください」。おじいさんは、「私の下手な踊りを気に入ってもらえて光栄です。これからも一緒にさせてもらえることを嬉しく思います」と答えました。

しかし、おじいさんのことを疑った鬼頭は、「明日、必ず戻ってくるよう、何かを担保として置いて行け」と言いました。おじいさんは了承しましたが、何を置いて行けばよいかわかりませんでした。そこで、鬼の一匹が、「あいつの顔に瘤があるじゃないか。人間は、皆、瘤を持

つことがよいことだと言うし、大事にするから、瘤を取れば、明日、必ず戻って来るんじゃないか」と鬼頭に言いました。鬼頭は、この提案に満足し、おじいさんは、瘤を取られたら痛みを感じると思い、驚きました。そして、鬼頭は、おじいさんの瘤に手を伸ばし、瘤は簡単に取れ、おじいさんは、気に入らなかった瘤がなくなったことに喜びました。そして、次の瞬間、不思議なことに周りにいた鬼や妖怪たちは姿を消したのです。おじいさんは、何か夢を見ているかのように思い驚き、瘤が痛みなく取れたことに嬉しく思い、家へと帰って行ったのです。

家で帰りを待っていたおばあさんは、おじいさんの遅い帰りに心配していました。おじいさんが帰ってくると、「あなた。なぜこんなに遅かったのですか。雨と雷で難儀しているのではないかと心配していました。さあ、中に入って休んでください」と、おばあさんは言いました。そして、おじいさんの顔を見ると、そこには、瘤が消えていたのです。驚いたおばあさんは、疑わしく、こう聞きました。「あなたの瘤は、どうなったのですか。何も痕跡がありませんけど」。すると、おじいさんは、山で祭りをしていた鬼たちに出会い、踊ったり、歌ったりして楽しい時間を過ごしたことを話しました。そして、次の日も戻るよう瘤を担保として預けたと。そうすると、おばあさんは、「それはそうですか。不思議ですね。あなたは、よくあの山に出掛けるのに、今までそのような人たちを見かけたことがないですし。とにかく無事でよかったですね。あそこには戻らない方がよいと思いますよ。瘤を返してもらっては困りますからね」と言いました。「そうだね、あそこには戻らないよ」と、おじいさんは返しました。

おじいさんの近所には、顔に瘤の付いた同い年くらいの別のおじいさんが住んでいました。彼は、おじいさんの瘤の話を聞くと、すぐさま、おじいさんの家を訪ね、「瘤が取れてよかったね。昨日、山に出かけた時、鬼たちに出会ったことは本当かね」と、おじいさんに尋ねました。すると、おじいさんは、「本当です。とても幸運でした」と答えました。「私も山へ行って、この瘤を取ってもらいたいのだ。しかし、何も払わずに取ってもらうわけにはいかないだろう。どうやって取ってもらったのかね」と聞きました。おじいさんは、話のすべてを近所のおじいさんに説明し、彼は、早速、家へと帰り、山に出かける準備をしました。

山を歩いていた近所のおじいさんは、教わった通り、木の下の穴に入り込み、鬼たちを待つことにしました。そして、少し暗くなる前に、そこに大勢の鬼たちがやって来たのです。宴会を始めた鬼たちは、昨日のおじいさんの話をしだしました。「昨日のおじいさんは、まだ来ないのかね」と一匹の鬼が言うと、これを聞いたおじいさんは、穴から姿を現し、「あなたたちが来るのを待っていました」と説明しました。そして、練習もせずに、鬼の前で踊り出したのです。しかし、おじいさんは、昨日のおじいさん程、踊りが上手ではなく、ただ、跳ねて走り回っているように見えたのです。これを見た鬼たちは、不満げに「こいつは、全く踊りが下手なやつだ。昨日のおじいさんとは大違いだ。こいつは用なしだ。昨日のおじいさんが戻って来ないというならば、こいつに、この瘤を返して戻って来なくてよいと言っておけ」と言い、おじいさんの顔に瘤を付けたのです。瘤が二つになったおじいさんは、とても当惑し、両手で瘤を隠しながら、家へと帰って行ったのです。

昔噺勝々山

昔々、ある所に、おじいさんとおばあさんが、一緒に暮らしていました。二人は、とても正直で、穏やかな人たちでした。世の中によい人だけがいればよいのですが、とても悪い人たちもいます。そして、この傾向は、男性と女性に限らず、動物たちにも現れるのです。

おじいさんの畑は、近くに巣を持っていた狸の略奪によって相当な損害を与えられました。

これに怒ったおじいさんは、よい心を持ちながらも、ついに狸を罠で捕まえました。

成功に喜んだおじいさんは、狸を持って帰り、おばあさんにこう言いました。「ばあさんよ、喜べ。うちの畑の侵入者を捕まえたぞ。こいつの四本足を縄で縛って、垂木につり下げておこう。そして、今夜の狸汁に使おうじゃないか。ちゃんと逃げないように見ておいてくれ」と。そして、おじいさんは、再び畑へと戻ったのです。

つり下げられたまま苦しんでいた狸は、おばあさんを騙して逃げる方法を考えつき、臼で麦を打っていたおばあさんに、こう言いました。「ばあさま、あなたは体が弱いのに、その重たいすりこぎを使って作業をするのがとてもつらそうですね。僕は暇ですから代わりにやってあげましょう」。おばあさんは、ちょっと休憩を取りたいと思っていたが、狸が逃げてしまうことを恐れ、こう答えました。「それは結構です。おじいさんがいない間に、おまえを放したら、おじいさんに怒られます」。しかし、狸は、優しい声で、こう続けました。「確かにおばあさんは正しいです。しかし、僕は、悪いことをして縛られたのですから、罰せられるのは当たり前のことです。ですから、逃げないことを約束しましょう。そして、おじいさんが帰ってくる前に、僕をもとの位置に戻してくれれば、おばあさんも怒られずに済むのです。僕は、逃げたいからこう言っているのではありません、おばあさんを手伝いたいから言っているのです」。優しくて人のよいおばあさんは、狸が逃げないことを信じてしまい、縄をほどき始めました。そして、狸の前足がほどかれると、狸は、「さあ、やってあげよう」と言いました。おばあさんは、狸にすりこぎを渡し、こうして逃れた狸は、麦を打つふりをして、突如、おばあさんに飛びかかり、ついには殺してしまったのです。なんて悪い動物なのでしょう。

狸は、おばあさんの肉を自分の肉の代わりに使い、汁を調理して、おじいさんに食べさせることにしたのです。汁が出来上がると、おばあさんの服に着替え、おじいさんを騙すために、おばあさんの姿に化けました。そして、家の中で座っておじいさんの帰りを待ちました。その夜、おじいさんは、何も知らないまま家へと帰ってきました。「あなたの帰りを長く待っていました。狸汁ができましたよ」と、狸は言いました。おじいさんは、わらじを脱ぎ、足を洗ってから、食卓につき、汁を食べ始めました。

おじいさんが、汁を何杯かたいらげると、狸は、突然、正体を現し、大きな声で、「おまえが食べているのは、おばあさんの肉だぞ、床下の遺骨を見てごらん」と叫びました。そして、あざけるように笑いながら、外へ逃げて行ったのです。おじいさんは、大変驚き、おばあさんが死んだことがわかり、泣き崩れたのです。そして、「私の妻は、殺されてしまった。そして、さっき食べたおいしい汁が妻の肉で作られていたとは。妻のかたきを取ってやる、この残忍な狸め」。

悲しみにくれていたおじいさんの家に、近くに住んでいた老いた兎が立ち寄りました。この兎は、狸と違い、とても優しくて心のよい兎でした。おじいさんと、とても仲がよかったので、おじいさんは、すべてのことを兎に説明しました。「私の妻は、あの老いた狸に殺されてしまいました。とても残念です」と。すると、兎は、「それは、とても残念です。今は、泣いている場合ではありません。すぐに、おばあさんの遺体を葬らないといけません。私が、おじいさんのために復讐を果たしてあげましょう。その間、気を落とさず、休んでいてください」と慰めました。おじいさんは、兎に元気づけられ、兎に、こう言いました。「おまえと狸は同じ動物なのに、心がこんなにも違うなんて。あいつは、私の妻を殺し、非常に邪悪で、重大な罪を犯したのだ。おまえに罰せられて、罪を償うべきだ」。忠実な兎は、「安心してください。二日か三日あれば、あいつをやっつけることができます」と言い、帰って行ったのです。

兎は、自分の穴に戻ると、早速、狸を探しに行きました。狸は、自分が見つかるのを恐れて、穴の深いところで隠れていました。そして、やがて兎に見つかり、狸をおびき寄せるのが一番よい方法だと考えました。

その日は天気がよかったため、兎は、狸に「おーい、狸さん、家に

いるのか。風邪でもひいたのか。なぜ出てこないのだ。一緒に山へ行って芝刈りでもしようじゃないか」と誘いました。すると、狸は、「それは楽しそうだな。この穴にいて、とても疲れたので行こう」と言いました。

兎と狸は、一緒に出かけ、丸一日、山を歩き、たくさんの芝を刈りました。そして、芝の束を一匹ずつ背負って帰ることにしました。すると、兎は、準備していた火打ち石を叩き始めました。狸は、「今の音はなんだ」と言うと、兎は、「この山は、かちかち山と呼ぶんだよ。だから、その音を真似てみただけだ」と答えました。そして、狸の束に火を付けると、束が燃え始めました。振り向いた狸は、自分の束が燃えているのに気づき、驚きながら「助けて。助けて」と叫びました。熱い炎に苦しむ狸は、地面にごろごろとしながら火を消そうとしました。兎は、自分の思い通りにことが進んだのに満足し、「これは危ない」と言い、炎に向かって扇子を振りました。炎は、さらに強く燃え上がり、狸は、泣きながら自分の穴へと戻って行きました。

次の日、狸は、火傷を負ったまま、ずっと横になっていました。すると、兎がやって来て、「火傷はどうだい」と尋ねました。「この唐辛子を混ぜた塗り薬が、火傷によく効くんだよ。持ってきたから、使うといいよ」と言い、狸は、「あー、ありがとう。早速、背中に塗ってくれ」と言いました。そして、兎は、遠慮なく狸の火傷に塗ると、火傷にひどくしみて、狸は、痛みに耐えられず、再び地面にごろごろしながら、穴の中で苦しみました。

こうして兎は、狸を二度いじめ、そろそろ殺そうと思い、家へ帰り作戦を練りました。火傷が治りかけた狸は、兎の家へとやって来ました。そして、また、山に遊びに行こうと誘いましたが、兎は断りました。兎は、また、山に行くのではなくて、今度は、海へ遊びに行こうと言いました。兎は、自分と狸のために船を二つ造るつもりだと言い、この船で遊ぼうと誘ったのです。二匹は、一緒に海へ行くよう約束し、狸は帰って行ったのです。

兎は、早速、船を造り出しました。しかし、船は、おじいさんの復讐を果たすために造るものだったので、一つは木で造り、もう一つは粘土で造ることにしました。勿論、兎は、自分は木でできた船に乗るつもりでいました。そして、狸には、粘土でできた船に乗せるつもりでいました。船が完成すると、狸は、再び兎の家へと向かい、「船はできたかね」と尋ねました。兎は、「できましたよ。見てごらんなさい。この素晴らしいできを」と答えました。狸は、「では、早速、海へ出かけよう」と言いました。すると、兎は、「自分で漕げるかね」と尋ねました。狸は、「大丈夫だよ」と答え、二匹は、船を担いで海岸へと向かいました。しかし、兎は、二つの船を黒く塗っておいたため、一つは木でできていることと、もう一つが粘土でできていることは兎にしかわかりませんでした。そして、狸は、粘土の船に乗り、二匹は、海へと出ました。兎は、「なんてきれいな景色なんだろう」と狸に言いました。狸は、「そうだね、天気もよいし、海も落ち着いていて楽しいね」と答えました。すると、兎は、「そうだ、この船で競争をしようじゃないか。ただ、漕いでいても楽しくはないし」と言いました。「それは楽しそうだ」。「準備はいいか」。「一、二、三」の合図で、二匹は、思い切り前へと進みました。すると、ぬれた狸の船は沈み始め、それに気づいた狸は、こう叫びました。「僕の船が沈んで行くよ。待って兎さん、助けて」。すると、兎は、漕ぐのを止めて、狸に、こう言いました。「私の近くに住んでいたおばあさんを殺し、その肉で汁を作ったおまえは人殺しだ。私が、おじいさんのために、おまえに復讐を果たすと約束したのだ。人間に危害を与えるものは、罰せられることが必要なのだ。おばあさんの死の復讐をおじいさんの代わりに果たす時が来た。かちかち山での火傷、そして、この事故はおまえの悪い行いに対する償いだ」。そして、兎は、狸の頭にとどめの一発を食らわせ、残忍な狸は、壊れた船と共に海へと沈んでいったのです。

復讐を果たした兎は、おじいさんの家へと戻り、かちかち山の話をしました。おじいさんは、とても喜び、「これで私も安心したよ。おば

あさんの魂もきっと喜んでいるでしょう。おまえは、とても強くて勇敢な兎だ」と感謝しました。そして、兎のよい行いをたたえ、たくさんの御馳走を与えました。その後も、おじいさんは、兎に餌を与え続け、我が子のように愛しました。

昔噺花咲爺

ずっとはるか昔、ある所に、年老いたおじいさんとおばあさんが、つつましい生活を送りながら、小さな土地を耕して暮らしていました。二人は、まさに善良な人たちで、皆に愛されていました。しかし、もう、歳をとっていて子供がいなかったため、代わりに「シロ」という犬に餌をやっていて、大いにかわいがっていました。犬の中には、悪い犬もいるので、絶対にとは言えないが、大体の犬は飼い主によく仕えるものです。シロは二人に自分の子供のように愛されていたので、シロも二人を自分の親のように慕っていました。毎日、おじいさんが、芝刈りをしに山へと出かけると、シロは付いて行き、毎晩、家の中と畑を見張っていました。シロは、自分の飼い主によく仕える犬で、飼い主に頼まれるどんな仕事も嫌がらずにやりこなしていました。それで、夫婦は、シロのことをとても愛していました。二人は、おいしい物を手に入れると、自分たちで食べずにシロにやっていました。夫婦の隣の家には、別の年寄りの夫婦が住んでいました。しかし、彼らの性格は、隣の夫婦とは大違いでした。二人は、嫉妬深い悪い人たちで、いつも他人をねたむ人たちでした。彼らにも子供がおらず、隣の夫婦がシロをかわいがるところを見ると、憎らしく思いました。そして、シロが、自分たちの家の台所の出口にたびたびやってくると、大きな声で怒鳴るように、「この獣が、野良犬め」と叫び、たまには、水や棒をシロに向かって投げていました。

ある日、シロが、裏の畑で吠えているのをおじいさんが聞き、様子をうかがいに行きました。シロは、おじいさんがやってくるのを見て、おじいさんの隣に駆けつけ、着物を引っ張りながら畑のすみへと連れて行きました。大きな木の下に着くと、シロは、地面を足で掘り始めました。おじいさんは、シロが何を掘っているのか注意深く見ると、シロは、おじさんに「ここを掘って」と促すように見返しました。それを理解したおじいさんは、急いで鋤を持ってきて、そこを掘り出したのです。鋤を土の中に入れると、何か硬い物に当たり、さらに詳しく調べてみると、そこには小判がまぶしく輝いていました。もっと深く掘ったおじいさんは、たくさんの小判を見つけました。とても驚いたおじいさんは、心の底から喜びました。そして、急いで妻を呼んで、二人で家に持って帰りました。宝は、自分たちの土地から出てきたものなので、当然、自分たちのものになりました。二人は、運良く、とても裕福になり、シロを今まで以上に愛しました。

次の日、隣に住んでいた悪いおじいさんが、家にやって来て、いつもと違って丁寧な挨拶をして、こう言いました。「あなたの犬のシロを少しの間だけ貸してください」。いつもはシロに水や棒を投げて嫌っていたおじいさんが、今度はシロを貸してほしいと言ってきたので、夫婦は、奇妙に思いました。おじいさんは理解できなかったが、よい人だったので、シロを貸すことにしました。

隣のおじいさんは喜びながら、シロを自分の家へと連れて行きました。幸いにも犬を借りることができたと妻に伝え、シロのおかげでたくさんの収益を得ることができると思いました。妻が持ってきた鋤を手に、おじいさんは、犬を連れて、畑の奥に生えていた大きな木へとやって来ました。そして、欲張りな口調で犬に、「おまえは、木の下で小判を掘ったのだな。ほら、ここに木があるぞ。宝をたくさん見つけたら、魚をたっぷりとご褒美にくれてやろう」と言いました。そして、シロの首をつかみ、鼻を土になすり付けました。我慢できなくなったシロは、猛然と地面を掘り始め、これを見たおじいさんは、「おー、ここか。それでは、わしが掘ってみよう」とシロをどかし、土を何回か掘りました。しかし、普通の石以外に、何もキラキラ光る物や硬い物は見つかりませんでした。さらに深く掘ると犬の糞が出てきて、その

臭い匂いが、おじいさんの鼻を攻撃しました。これにとても怒ったおじいさんは、シロに「なんだ、これは。色は同じでも、うちの土には糞しか見つからないのか。おまえの土には、金貨があると言うのに。この悪いやつめ、こうしてやる」と言いました。この時、シロは、とても怖くなり、逃げようとしました。しかし、うまくいかず、おじいさんに悲惨にも叩き殺されました。そして、おじいさんは、シロの死体を自分で掘った穴に投げ込み、何も知らないふりをして土で埋めました。シロの家では、おじいさんが、シロのことが不安になり、隣の家へ行きました。「シロを返してください」と言うと、隣のおじいさんは、傲慢な口調で、怒りながら、シロが悪いことをしたから殺したと言いました。これにとても驚いたおじいさんは、「うちの犬を一体なぜ殺したのですか。シロはどのような悪いことをしたのですか」と尋ねると、高慢な口調で、「私があいつを殺した理由について、もっと深く考えるべきですよ。最近になって私の畑に狐たちが現れ、私の作物を荒らしに来るのだ。だから、シロに見張ってもらおうとしたのだが、私に仕えようとはせずに、庭に汚いものを排出したので、怒ってあいつを叩いたのだ。そしたら、あいつは死んでしまった」と答えました。非常に残念に思ったおじいさんは、悲しくなり、泣き始めました。しかし、これほどの邪悪な人と話すのは愚かだと思い、「うちの犬が悪かったけれど、うちの犬を埋めたいので、遺体を私にください」と言いました。しかし、隣のおじいさんは「それはできません、なぜなら、もうあいつをあの木の下に埋めたからです」と言いました。シロの死体さえも取り返せないと思ったおじいさんは、「すみませんが、ならば、あの木をどうか私にくれませんか」と言いました。すると、邪悪なおじいさんは、「いいでしょう。しかし、あの木をどうするつもりですか」と尋ねました。こう聞かれたおじいさんは、「あの木の下に埋まっているので、それをうちの犬の記念物にしようと思います」と答えました。

　こうして大きな木を手に入れたおじいさんは、初めは自分の思うままに植えようと思いましたが、計画を変え、蒸したきびで、きび団子を作るための臼を作りました。そして、おじいさんとおばあさんは、その臼を使って、きびを叩き始めると、不思議にも、一升のきびを入れると二升のきびが、二升のきびが三升へと量が増えていったのです。そして、ついには、よいきび団子が自然に出てきたのです。とても驚いた夫婦は、まず、シロの名前と亡くなった日にちと時間が書いてある戒名の木板に捧げ、さらに、お祈りを捧げました。後ほど、自分たちで食べてみると、とてもおいしいことに気づくのです。一つ食べただけで、三食分食べたくらいお腹がいっぱいになったのです。またもや隣の悪いおじいさんがやって来て、団子を叩くために臼を借りたいと言ってきたのです。おじいさんは貸したら返ってこないと思い、気が進みませんでしたが、仕方なく貸すことにしました。

　二、三日経っても、隣のおじいさんは、臼を返してこなかったので、おじいさんは、彼の家へと向かい、返してもらうようお願いしました。しかし、この時、隣のおじいさんは、既に、臼をバラバラに砕いて釜で焼いていたのです。これに驚いたおじいさんは、「私の臼を壊して焼くなんて、あなたは残忍すぎる」と言いました。しかし、邪悪なおじいさんは、「あなたの臼は、あなたにとって大事な物なので壊すつもりはなかったのですが、きびを叩いていると臭い匂いがして、なんと中から糞が飛んできたのです。そして、私のきびが駄目になったのです」と言いました。これを聞いたおじいさんは、気の毒に思い、自分の臼を焼いたことを怒りませんでした。そして、「それは残念です。臼で焼けた灰を持って帰ります」と言いました。文句も言わずに、そして、残念にも思わず、灰を家に持って帰り、自分の庭にまき散らしました。すると、奇跡的に、これまで花や葉を咲かしていなかった梅と桜の木が開き、花を咲かせたのです。急な変化に驚いたおじいさんは、興奮して、とても喜びました。この美しい風景を見せようとおばあさんを呼び、おばあさんは見た時、とても驚き、何が起きたか尋ねました。おじいさんは、臼の話を最初からすべて細かく話しました。すると、おばあさんは、「きっとシロの魂がこの花を咲かせたのね、とても感謝

していますわ」と言いました。
こうして、おばあさんは、残った灰を集めて籠に入れ、大切に保管しました。
人はよいことをすれば、よい償いが返ってくるのです。そして、悪いことをすれば、悪い償いが返ってくるのです。
ある日、一人の武士が、突然、夫婦の家にやってきました。
「私は、吉野国の大和守の家来、ムカシ・ハナシロウと申します。近頃、殿の桜の木が死んでしまい、困っているところでございます。あなたが、枯れた木に花を咲かせる不思議な灰を持っていると聞いております。もし、それが本当であるならば、是非、殿の城に来て、桜の木に花を咲かせていただきたい」と言いました。おじいさんは、これを聞いて、「あなたの言う通り、灰を持っています。私が、殿様の城に行って桜の木に花を咲かせましょう」と答えました。家来は、早速の返事にとても喜び、おじいさんは灰を持って、その家来に案内され、城へと向かいました。
殿は、家来の帰りを待っているところに、おじいさんを連れて戻ってきました。すると、「おまえが、灰をばらまいて花を咲かせるじいさんなのか。わしが、ここから見ているから、早速、見せてもらおう」と言いました。おじいさんは、「わかりました。あなた様のご命令に喜んで従います」と言い、桜の木に登り、灰を枝にばらまいたのです。すると、木の枝から美しい花が咲き始め、殿はとても喜びました。おじいさんを隣に呼び、自ら酒をおじいさんの器に注ぎ、おじいさんの名前を「花咲爺」に変えるよう言いました。
殿は、とても満足し、おじいさんに山のような金と銀、そして、布地と様々な宝を与えました。
これで、おじいさんは、いっぺんに、とてもお金持ちになりました。この話を聞いた欲張りなおじいさんは、自分が持っていた臼の灰を籠に入れて出かけました。そして、道ばたで、「私が、あの有名な花咲爺だぞ。死んだ木にも花を咲かせるぞ」と叫びました。そして、自分もお金持ちになろうと、殿の城へと行き、殿は、おじいさんを城の中へと呼びました。しかし、数日前のおじいさんとは別人だと気付き、おじいさんに、このことを問いました。すると、悪いおじいさんは、「私が、本物の花咲爺です」と言い、殿は、おじいさんに灰をばらまくよう命令しました。悪いおじいさんは、早速、持っていた灰を力いっぱいばらまきました。しかし、桜の木から花は咲かず、灰が、殿の目と鼻に入ってしまったのです。これに怒った殿は、「この偽物の花咲爺。私を騙したな」と言い、この横しまなおじいさんを捕らえ、牢獄に入れたのです。
シロを大事にしていたよいおじいさんは、それから一生裕福で幸せな生活を送っていったのです。
これは、善と悪とを対照した話です。横しまな心の人には、ひどい報いがあり、善良で正直な人には褒美があるということです。

昔噺舌切雀

ずっとずっと昔、あるおじいさんが、おばあさんと一緒に暮らしていました。おじいさんは、とてもよい人でたくさんの人に愛されていました。子供がいなかったため、おじいさんは、雀に餌をやり、自分の子のようにかわいがっていました。ある朝、おじいさんは、山へ芝刈りに出かけました。おじいさんがいない間、おばあさんは、井戸の横で洗い物をしていました。朝に作っておいた糊を作業に使うため、台所へと向かいました。しかし、糊はそこになく、入っているはずの器しか見つからなかったのです。「ふん」と疑わしい表情を見せたおばあさんは、「誰が一体糊を器から取ったのか」と言い、部屋を見回しました。おじいさんに気に入られていた雀は、「おばあさん、何を探しているんですか」と尋ねました。「さっきまで、ここに置いてあった糊が、なぜなくなっているのかな」と、おばあさんは答えました。「それは私が食べました」と雀。「何。あんたが食べたって言うのか」。「許してください。あの器を私の餌の器と間違って食べました」。

こう言って雀は、おばあさんに許しを願いました。しかし、おばあさんは、許そうとはしませんでした。性格も悪く、夫のおじいさんに仕える方法も知りませんでした。自分の夫のペットは、自分のペットでもあると思っていたのです。しかし、その雀は、ちっとも気に入りませんでした。そして、雀の行動を見て、苦悩にさいなまれたおばあさんは、こう言いました。「おまえは、あの糊を食べるなんて悪いやつだ。悪い鳥にはこうしてやる」。

おばあさんは、ハサミを持ってきて泣き叫ぶ雀を籠から取り出しました。「この舌で食べたのかね」と言い、残酷にもかわいそうな雀の舌を切り取ったのです。そして、おばあさんは、「やっと私の復讐を果たせた。おまえは、もういらない。この家から出て行きなさい」と言い、ついに、雀を追い出したのです。なんて、ひどいおばあさんなのでしょう。

留守中に何が起きたのか知らず、おじいさんが帰ってきました。雀に会うのを楽しみにしていたおじいさんは、雀が籠の中にいないことに気づき、おばあさんに、こう言いました。「おばあさん、わしの雀は一体どこへ行ったのだ」。しかし、おばあさんは、知らないふりをして、こう言いました。「籠の中にいないのかい。私は、見てなかったので知りませんよ」。すると、おじいさんは、「あの雀は、とても慣れているから逃げたりはしないぞ。おまえが追い出したなら話は別だが。本当のことを言いなさい」と返しました。ついに、おばあさんは、隠していられなくなり、こう言いました。「わかりました。本当のことを言いましょう。あの雀は、私が洗い物に使う糊を全部食べてしまったので、ハサミであいつの舌を斬ってこの家から追い出したのです」。「舌を。斬った」と、おじいさんは、これを聞いて大いに驚き、ついに、大声で泣き始めたのです。「あー、なんてかわいそうなことを」。

次の朝、おじいさんは、雀を探しに出かけました。おばあさんは、これを気に入りませんでした。おじいさんは、さまよいながら、「舌切雀、おまえのお宿はどこにあるのだ」と叫びました。すると、おじいさんの声を聞いた雀は、姿を現し、自分の家へと出迎えました。

「あなたに会えてとても嬉しいです」と、雀は喜びながら言いました。「おー、ここにいたのか。おまえを探しに来たのだ」と、おじいさんは答えました。

「ご親切にありがとうございます。どうぞ家に入ってきてください。人間には、少し狭いかもしれませんが」と言い、雀は、おじいさんを家の中へと案内しました。鳥の巣にしては、とても美しくできていて、柱や屋根は竹でできていました。おじいさんを居間に案内すると、雀は、「我が家へようこそ。私のしたことを責めないで、わざわざ会いに来てくださりありがとうございます」と言いました。「おまえに会えて、とても嬉しい。妻が、おまえの舌を斬って、大変、悪いことをしたと思っています。妻の行動は非難に値する」とおじいさん。すると、雀は、おじいさんのために盛大な宴会をしようと思い、たくさんの料理を出し、雀にしか踊れない踊りを披露しました。長い時間を大いに楽しんだおじいさんは、「これほど楽しい宴会は初めてじゃ」と喜びました。

日は沈み始め、おじいさんは、別れを告げる心づもりをしました。しかし、雀は、「そうは急がずに、今夜は、うちで泊まっていってください」と言いました。おじいさんは、「親切にありがとう。しかし、自分の家を放ったまま、夜を過ごすことはできない。また、会いに来るから、今日は帰らせてもらおう」と雀に言いました。すると、雀が、物置から竹の箱を二つ持ってきました。「あなたが、帰られることを残念に思います。ここに二つの箱を用意しました。一つは軽くて、もう一つは重いです。おじいさんに、この二つの竹の箱のうち一つ差し上げましょう」と言いました。「ありがとう。しかし、わしは、もう歳ですから、軽い方を選ぼう」と、おじいさんは言い、箱を背中に担いで、雀にお別れを言いました。「どうか気をつけて帰ってください」と雀は言い、おじいさんは、帰って行きました。

この間、家で一人で帰りを待っていたおばあさんは、文句を言い始

めました。「なぜこんなに遅いのに帰ってこようとしないのか。道で倒れたのかもしれないし、あんな悪い雀を探しに行くなど無駄なことで、愚かだ」と言いました。

ぶつぶつ言いながら玄関を出てみると、遠い彼方に、背中に箱を背負ったおじいさんが見えたのです。おじいさんがやっと家に着くと、おばあさんは、こう言いました。「こんな時間まで一体どこに行っていたのですか」と。すると、おじいさんは、「わしの雀を探しに出かけていたのです。そして、あの雀の家まで迎えられて宴会をしてくれたのです。その帰りに、この竹の箱を渡されたのです」と答えました。背中から箱を下ろしたおじいさんは、続けて、「箱は二つあったのじゃが、軽い方を選んだのです。さあ、何が入っているか調べてみよう」と言いました。そして、箱を開けてみると、なんとそこには、たくさんの金と銀、そして、貴重な宝石がたくさん入っていたのです。おじいさんは、大声で喜びながら、今日見た雀の踊りの真似をしました。しかし、おばあさんは、これに満足せず、不満げにおじいさんに、こう言いました。「なぜ重い方の箱を選ばなかったのです。あなたは、正直すぎて愚かなのです」。すると、おじいさんは、「なぜおまえは、この箱で満足できないのか。欲張ってはいけない。軽い箱でも、これだけの宝が入っていたではないか」と言いました。おばあさんは、「重い方の箱の方が、よいのに決まっているじゃないですか。もっと金銀が入っているし。違いますか。それなら、私が、直接、雀の家に行って重い方をもらってきますよ」と言い、出かけようと立ち上がりました。

すると、おじいさんは、「おまえは行ってはならぬ。雀の舌を斬ったのだから、雀がおまえを好きじゃないのは明らかだ。おまえに箱をあげるわけがないじゃないか」と言いました。しかし、欲張りなおばあさんは、おじいさんの反対を押し切って雀の巣を探しに出かけました。

「舌切雀、お宿はどこじゃ」。

おじいさんが帰った後、雀たちは、おじいさんが次に来る時、どうもてなすか、また、おばあさんの冷酷さについて話していました。すると、巣の扉に「とんとん」という音がしました。扉を開けてみると、そこには、今、噂していたおばあさんがいました。雀は、おばあさんにひどいことをされたが、挨拶をしました。すると、おばあさんは、こう言いました。「私は重い方の箱をもらいに来たよ。さっさと帰りたいから、お前の料理にも踊りにも興味はない。ただ箱が欲しいだけだ」。雀は、おばあさんの我が儘に大変驚きました。しかし、「それでは、重い方の箱をあげましょう」と、雀は言いました。箱をもらったおばあさんは、大喜びしました。そして、雀に別れも言わずに、家へと帰って行ったのです。

箱は、なんと大きな石二つ以上の重さがあり、頑張ってはいたが、疲れたおばあさんは、途中で背中から下ろし、汗を拭いて、少し休むことにしました。箱の中身がどうしても気になるおばあさんは、家に帰らずに箱を開けました。すると、箱の中から大きな妖怪と三つ目の怪物、そして、様々な蛇と毛虫が出てきたのです。これを見たおばあさんは、大声で驚き、これで、妖怪たちは、おばあさんのことに気付き、攻撃し始めたのです。あまりにも恐怖を感じたおばあさんは、死に物狂いで、そこを脱出し、自分の家へと走って行ったのです。おじいさんに、このことを説明すると、おじいさんは驚きもせずに、優しく、こう言いました。「わしの思っていた通りじゃ。欲張りな人には、そういうことが起きるのだ」。これを聞いたおばあさんは、おじいさんの言うことに納得しました。そして、その日からおばあさんは、人が変わったように優しくなり、おじいさんと仲良く過ごしていったのです。これで話は終わりです。

昔噺猿蟹合戦

昔々、正直な蟹とその友達の悪賢い猿がいました。ある日、散歩をしに川岸へとやって来ました。そこで、蟹はおにぎりを、猿は柿の種を見つけました。蟹は、とても喜び、大きな声で種を見せながら「やったー、いいもの見つけた」と喜びました。そこで、蟹を見た猿は、こ

う言いました。「僕もいいもの見つけたぞ」と。
　猿は、柿が大好物ですが、種だけでは何もできません。しかし、蟹が拾ったおにぎりは、柿と同じくらいおいしそうで、その場で食べることができます。おにぎりを欲しいと思った欲張りな猿は、ねたみのあまり蟹に率直に、こう言いました。「友よ、そのおにぎりを僕の柿の種と交換しないか」。「それは嫌だね。僕のおにぎりは、御馳走なのに、君の種は、食べられないただの種だ。その種をもらっても、僕にはどうしようもできない」と言いました。しかし、猿は、とてもずる賢く、おにぎりを蟹から奪う方法を知っていました。「へへ、喋る前に頭を使えよ。この種は、ただの種かもしれないが、植えれば大きな木になって、大量の柿を食べられるようになるんだぞ。君のおにぎりは、おいしそうだけど、食べたらそれで終わりじゃないか。本当のことを言えば、君にこの柿の種をあげるのがもったいないくらいだ。でも、君にも、木に実がなるところを見てほしいのだよ。最初は交換しようと思ったけれど、僕が、この種を植えれば、たくさんの柿が食べられるようになるからね」。
　猿は雄弁な口調で蟹を説得したので、蟹は交換をせざるを得ないと思いました。しかし、蟹は、これが罠だとは気づきませんでした。そして、二人は、おにぎりと柿の種を交換しました。猿は、すぐさまおにぎりを食べ終え、二人は、別れました。
　蟹は、家に帰ると、早速、柿の種を植えました。それから毎日、丁寧に世話をし、数日が経つと、芽が土から出てきました。そして、すぐに大きく成長し、蟹は、とても喜びました。柿を食べるのを本気で楽しみにしていた蟹は、こう言い聞かせました。「どんどん大きくなーれ。皆が言うように、桃が実るのは三年。しかし、柿が実るのは八年。これで八年後の秋には、たくさんの柿が食べられるぞ」と。
　そして、時は矢のように飛び、ついに、八年目がやってきました。その秋、蟹は、大きく育った木の枝に、何百もの熟した柿が見えました。蟹は、大いに喜びました。しかし、柿を取ろうと思った時、自分の背が小さすぎることに気づいたのです。それに、蟹は、横に歩くのが習慣で、木登りなど、とうてい不可能だということです。蟹は、とても困りました。
　そこで、蟹は、思いつきました。猿が木登りを得意とするのを知っていて、早速、猿の家へ向かい、柿を取ってもらうようお願いしました。同調した猿は、早速、柿の木がある蟹の家へと向かいました。
　そこには期待通り、たくさんの柿が実っていました。木に登った猿は、おいしそうな柿を一つ手に取り、味見をしました。一つが二つ、二つが三つと、猿は、柿を食べ続け、蟹に分けようとはしませんでした。心配した蟹は、猿に向かって、こう言いました。「おーい、猿さん。自分ばっかり食べてないで、私にも柿を投げてよ」。しかし、猿は、何も返事をせずに、柿を食べ続けました。とても残念に思った蟹は、もう一度、猿に呼びかけました。すると、猿は、「わかったよ。ほら、柿をやるよ」と言い、一つ投げました。落ちてきた柿を蟹は食べようとしましたが、とてもすっぱいことに気づきました。そこで、蟹は、まずいのではなく、もっとおいしいのを投げるよう言いました。だが、猿は、まずい柿をもう一つ投げました。この猿は、とても性格の悪い者で、まずい柿を蟹にぶつけてやっつけようとしたのです。柿を全部、自分の物にしようとする猿に、蟹は、もう一度おいしい柿を投げるよう言いました。そして、ついに、硬い青い柿が蟹の頭に当たり、蟹は、倒れてしまいました。しかし、猿は止めようとはせず、ついに殺してしまったのです。これを見た猿は、にやりと笑い、その木の柿を全部、籠に入れて持ち帰りました。
　猿に殺されたかわいそうな蟹には、一匹の息子がいました。その日、その蟹は、友達と池へと遊びに出かけていました。そして、家に帰ってくると、悲しみを誘うお父さんの死体が横たわっていました。息子の蟹は、狂いそうになり、大きく泣き崩れ、お父さんの隣で悲しみました。そして、やっと我に帰った蟹は、泣いても無駄だと気付き、残された道はお父さんを殺した犯人を探すことであると気づきました。

しかし、犯人を見つけることは簡単なことではありません。そこで、柿の木から実がすべてなくなっていることと、青い柿が地面に落ちていることに気づき、あの猿が犯人だと思いつくのです。怒りを覚えた蟹は、すぐさま、猿をやっつけようと猿の家へと向かいました。しかし、猿は、とても強い生き物で、自分が戦っても勝てないと気づき、いったん自分の家へと帰ってきたのです。そこで、蟹は、仲間を呼んで助けてもらおうと思ったのです。「そうだ、友達の石臼さんに頼んでみよう。彼はお父さんと仲がよかったし、公平でよい人だし」。そう言って、蟹は、石臼の家へと、急いで向かいました。親友の唯一の息子であった蟹を石臼は歓迎しました。すべてのことを涙ながらに話すと、石臼は、驚きを隠せずに言葉を失いました。そして、真剣な表情で、蟹に、こう言いました。「おまえに起きたことは、とても残念だ。唯一の道は、おまえのお父さんを殺した犯人をやっつけることだ。私は、できる限りのことをしておまえを手伝おう」。これに勇気づけられた蟹は、こう返しました。「感謝の気持ちでいっぱいです。あなたは、僕がこうやってくる前から助けてくれるとおっしゃっていました。あなたは、本当に親切な人なのですね。お願いします」。この言葉を聞いた石臼は、喜んで蟹の頼みを引き受け、銃と槍の先生の焼け栗と大蜂を呼びました。すぐに、駆けつけた栗と蜂は、石臼から蟹の死の話を聞きました。そして、蟹の息子に自己紹介をしました。石臼は二人に近づき、まじめな声で、こう言いました。「この子は、あの猿にお父さんを殺され、復讐を果たしたいとのことだ。しかし、この子は、まだ幼く、体も弱いので、私のもとへ来て助けを求めてきたのである。勿論、私は、この子を助けるが、君たちもこの子のことを助けてくれないか」。そこで、栗は、「わかりました。この子を助けましょう。というのは、今回のことの発端は柿であり、柿だって僕と同じ木の実ですから」と言いました。蜂も、「あの猿は、何度も私の巣に来て、蜂蜜を襲撃しました。あの猿は、大嫌いです。私も、あの猿に罰を与えるのを手伝いましょう」と言いました。蟹は、これを聞いて、大きく喜びました。

四人は、猿をやっつけるための作戦を練ってから、それぞれの家へと帰りました。しかし、石臼は、保護者として蟹について行き、蟹の役に立とうとしました。そして、お父さん蟹の葬儀を終わらせました。

ここで、猿の行動を見てみましょう。蟹を残酷に殺した猿は、柿をたくさん手に入れて、大変、喜んでいました。しかし、自分が、とても悪いことをしたのに気づき、いつか蟹の息子に仕返しをされるかもしれないと怯え始めたのです。そして、その日から、昼も夜も不安なまま、毎日を過ごすようになったのです。しかし、猿は、動物ですから、この不安も長くは続きませんでした。ある日、猿は、こう思ったのです。「蟹を殺したせいで、たくさん心配をしたけれど、それは間違いだった。もう怯える必要はない、なぜなら、誰も見ていなかったから。そして、蟹を完全に殺したから、彼も喋れまい。だから、この世界で、誰も私が蟹の敵だとはわからないだろう」。そして、猿は、このことを忘れ、何も知らないふりをしたまま、いつも通り、生活を過ごすようになったのです。

そして、ある日、猿のもとに蟹の息子から使者がやってきて、次の通り話しました。「一週間前、あなたの友人である蟹が柿の木から実を取ろうと木を登り、高い枝から落ちてしまい、強く石にぶつかって死んでしまいました。今日で、丸一週間が経ちましたが、息子の蟹は、お父さんの友達を皆、呼んで食事をしたいと思っています。もし、時間があるのであれば、今日、僕の家に来てください。それに、柿の木をお父さんにあげたあなたに是非、最初に来てほしいです」。これを聞いた猿は喜んだが、驚いたように使者に向かって、こう言いました。「それは本当か。私がおにぎりと取り替えた柿の種の木から落ちて死んだことは、とても残念なことですな」。こうして、猿は、あたかも本当に悲しそうにして、涙をこぼしました。しかし、使者は、猿が演じていることをわかっており、怒りを覚えました。しかし、その感情を見せずに、「必ず来てください」と猿に言いました。

猿は、このことで、今までの心配から解き放たれました。蟹の息子

が本当のことをまさか知っているとは思っていませんでした。そして、仕返しをされる心配もせずに、ただ、ご飯を食べるのを楽しみにして蟹の家へと向かいました。

それどころか、蟹は、復讐を果たすための準備を入念にしていました。そして、猿が家に着くと、蟹と仲間たちが家の前まで猿を出迎えました。中へと案内された猿は、自分の席へと向かいました。蟹は、猿にこう言いました。「あなたが来てくれたことを感謝しています。元気そうでよかったです」。猿は、「ありがとう。あなたのお父さんが、亡くなったことをとても残念に思っています」と返しました。少しすると、夕食が始まり、たくさんの食べ物と酒が出されました。食事を終えた猿は、お茶を飲みに別の部屋へと案内されました。そこで、蟹は、猿をおいて、お茶の準備に取りかかりました。部屋に一人で待っていた猿は、酔いがさめ、喉が乾き始め、我慢できなくなりました。そこで、温かいお湯を飲もうと囲炉裏のやかんに手を伸ばしたその時、火の中に隠れていた栗がはじけて飛び出し、猿の首に体当たりしたのです。これに驚いた猿は、全力で、すぐさま部屋から逃げようとしました。しかし、扉の側に隠れていた蜂が、今度は、猿のほっぺに針をさしました。大いに怖がった猿は、全力で家から逃げ出そうとしました。すると、今度は、天井から石臼が落ちてきて猿を潰し、身動きが取れなくなったのです。そして、とどめに、蟹が自分のハサミを見せながら姿を現し、猿に、こう言いました。「この悪い猿め、自分のせいでこうなったのだぞ」。そして蟹は、自分のハサミで猿の首を切り、お父さんの復讐を果たしたのでした。

昔噺文福茶釜

はるか昔、上毛国の館林というところに茂林寺というお寺がありました。このお寺のお坊さんは、茶会がとても好きで、特に抹茶を好んでいました。そして、お寺の行事で人が集まると、毎日のように人にお茶を出していたのです。

ある時、お坊さんは、とても形のよい茶釜を買いました。お坊さんは、毎日、この茶釜を見て、これほどよい茶釜はどこにもないと誇りに思っていました。ある日、この茶釜を見つめていると、いつか人を呼んで、自慢の茶釜でお茶を振るまおうと考えました。そうすれば、皆も、この茶釜に感心するだろうと期待しました。こう考えながら、お坊さんは寝ました。

その夜、お坊さんが寝ついた後に、なんと、突然、茶釜が動き出したのです。すると、ふたが空き、中から狸の頭が出てきたのです。狸は、手足としっぽを伸ばし、茶釜を背負って部屋の中を歩き出したのです。隣の部屋にいた弟子たちは、不思議な音に気づき、お坊さんの部屋の様子をうかがうことにしました。すると、そこには、お坊さんのお気に入りの茶釜が狸の手足としっぽを出して歩いていたのです。弟子の一人は、「見事な茶釜が狸に姿を変えた」と言いました。もう一人は、「まさか、茶釜が、狸に、どうやって変わるのだ。そんなことはあり得ない」と答えました。そして、狸は、弟子たちの方向へ歩き出すと、本当に狸の姿に変わったことに弟子は驚きました。「これは不思議なことだ。こっちに歩いて来ていますよ」と言い、お坊さんを起こして茶釜が狸に変わったことを話すことにしました。

眠りから起こされたお坊さんは、弟子たちの話を聞いて信じようとはしませんでした。なぜなら、茶釜は、もとの姿に戻っていたからです。「私の茶釜が、狸に姿を変えたとは、あり得ないことだ。おまえたちの言うことは信じられない。私の眠りを邪魔しないでおくれ。自分たちの隣の部屋に戻って、静かにしていなさい」と、お坊さんは弟子たちに言いました。

実際に見た弟子たちは、お坊さんの言葉を不満に思い、お坊さんに狸の姿をなんとか見せようと思いました。その夜、お坊さんが、お茶を入れようと茶釜に水を入れ、沸騰させるため、火にかけました。お湯が熱くなったその時、茶釜は、突然、動きだし始め、火から飛び出したのです。驚いたお坊さんは、「素晴らしい。私の茶釜が跳んだぞ、

誰か来て、捕まえておくれ」と言い、弟子たちを呼んだのです。動き回る茶釜をようやく取り押さえたお坊さんは、茶釜を調べました。しかし、そこには手足もしっぽも何もなく、普通の茶釜の姿を取り戻していたのです。茶釜を強く叩いてみても何も中から出てこず、茶釜の音が鳴り響くだけでした。

お坊さんは、弟子たちに茶釜を火にかけた途端、飛び跳ねたと説明しました。そして、もう一度、囲炉裏に入れて確かめることにしました。すると、茶釜は、また跳ね上がり、困ったお坊さんは、「こんな茶釜は持っていても仕様がない」とくず屋に売ることにしました。

次の日、茶釜を買い取りにきたくず屋は、茶釜を見て、こう言いました。「本当に、この茶釜を売りたいのですか。今までに見たことのない美しい形をしていますが、なぜ売りたいのです。悔しくないのですか。高値では買い取ることはできませんので、持っておいた方がよいと思います。嘆かわしいのですか」。しかし、お坊さんは、「悔しいですが、私は、既に茶釜をもう一つ持っているので、両方持っておく必要がないのです。買ってもらえませんか」と答えました。すると、くず屋は、「そうですか。しかし、高いお金は払えませんよ」と言いました。お坊さんは、いくらかと尋ねると、「四百文です」と答えました。四百文は、現在で言うと四銭。お坊さんは、ついに茶釜を売ることができたのです。くず屋は、これに大満足しました。なぜなら、形のよい茶釜を安値で買えたからです。これをまた、自分が売れば儲けになると考え、その夜、おいしい酒を飲んで寝ました。

その夜中、くず屋は、ぐっすり寝ている間、誰かが自分の名前を呼んでいるような気がしました。狸が、毛深い手で、くず屋の鼻をぴしゃりと叩くと、ついに目が覚め、そこには、お坊さんから買った茶釜が狸の手足としっぽを出して立っていたのです。これを見たくず屋は驚き、「おまえは、昨日、お坊さんから買った茶釜ではないか。なぜ化物の真似をするのだね。毛深い手足としっぽを出して歩いているからびっくりしたよ」と言いました。「おまえは、一体何者なのかね。狸なのか、それとも狐なのか。茶釜の幽霊ではないだろうね」と尋ねると、茶釜は笑いました。「私は、茶釜に扮した狸、文福茶釜と申します。とても不思議な動物で、茶釜にしか変身できないのです」と喋りました。すると、くず屋は、「じゃあ、おまえは、鉄でできた本物の茶釜ではないということかね」と聞くと、「そうです。本物の茶釜ではありません。しかし、使い方によっては、本物の茶釜より役に立ちますよ」と説明しました。「役に立つとは、どうやって役に立つのだ」と、くず屋は言いました。「では、話しましょう。私は、文福茶釜といって、普通の茶釜とは大きく違います。勿論、使い方も違います。茂林寺のお坊さんは、私の使い方を知らずに水を入れ、火にかけたため、私は、驚いて飛び出したのです。そして、捕らえられたり、殴られたりして、結局、あなたに売られることになったのです。なんと情けのない人たちなのか。何も知らないお坊さんには、本当に悩まされました」と説明しました。茶釜の不満を聞いたくず屋は、「なるほど、しかし、お坊さんは、おまえの正体を知らないまま、水を入れ、火にかけたのではないのかね。誰だって茶釜から手足としっぽが出ていたら驚くだろう」と言いました。

こうして、くず屋は、どうにか茶釜を使おうと思い、こう言いました。「使い方と言うのは、どういうことかね。おまえを箱の中にしまっても、動けなくなるだけだからね。一体どういうことだね」。茶釜は、「その通りです。もし箱に入れられてしまったら、息ができなくなります。生きているので、ちゃんと食べ物も必要なのです。食料なしでは生きていけませんですし、たまには外にも出たいと思っております。お寺にいた時は、皆が寝ている間に、食べ物を探しに歩き回っていました。しかし、とても大変でした。あなたに買われたのですから、どうか私をずっと愛してください」と言いました。かわいそうに思ったくず屋は、「まあ、私も男だからな。断ることは出来ないよ。おまえの願いに応えよう。食べ物をやろうじゃないか」と言いました。茶釜は、「感謝します。でも、私もいつも何もしていないわけではございません。

ちゃんと自分の分は頑張ります」と言いました。くず屋は、「おー、一体、何ができると言うのかね」と聞くと、茶釜は、「踊りや曲芸ができます」と言いました。「素晴らしいじゃないか。ならば、私は、今日でくず屋を止めて、代わりに茶釜の踊りを披露する仕事に専念しよう」と言い、茶釜は、「それでは、私も、精一杯頑張ります。きっとくず屋の仕事より儲かると思います」と言いました。

くず屋と茶釜は話し合いをした後、くず屋は、芸を披露するための建物を造りました。そして、音楽家たちを雇って、建物の前にたくさんの看板と絵を立てました。近くの村に宣伝するために人を送らせ、太鼓を叩きながら「館林で、素晴らしい見せ物があります。文福と呼ばれる茶釜が、とても不思議な芸を披露します」と彼らに大声で言わせました。この宣伝で、たくさんの人たちが興味を持ち、茶釜の芸を見ようと集まりました。

初日から大勢の人たちがつめかけ、入り口では坐った男が、大きな声で「どうぞ、お入りください。文福茶釜の曲芸だよ。鳥や犬、鼠などの芸もあります。そして、何より茶釜が、手足としっぽを出して踊りだす。まさに不思議な光景です」と叫んだ。男は、建物の中で待つ人たちに文福茶釜の不思議な披露が間もなく始まると言いました。まずは、曲芸、そして、様々な踊りと。

そして、芸が始まりました。文福茶釜は、ゆっくりとステージに上がり、観客にお辞儀をしました。そして、部屋の両端に付けられた綱の上に登り、綱渡りを披露しました。観客は、手足としっぽを出した茶釜が、このような動きをすることに大いに驚きました。そして噂は広まり、その後も、毎日、たくさんのお客さんが、劇場へと足を運びました。二〇日ほど芸を披露したくず屋と茶釜は、大変、大儲けしました。しかし、欲張りではなかったくず屋は、茶釜のつらい仕事に同情し、この商売を止め、ずっと餌が与えられるよう、茂林寺に返すことにしました。お坊さんに、ことの次第を全て説明し、儲けたお金の半分を渡して世話をしてくれるようお願いしたのです。それ以来、茶釜は、お寺の宝として大事に保管されたとのことです。

昔噺金太郎

昔々、相模国の足柄山に、山姥という女性が住んでいました。山姥には、一人の子供、金太郎がいました。二人は、山奥に住んでいたため、とても孤独な生活を送っていました。彼らのことを知っている人は少なく、二人はとても心の強い持ち主でした。特に金太郎は、小さい時から強い意志と筋力を持っていました。おそらく、大人でも彼の力に負けるでしょう。なんとも強い赤ちゃん。彼は、大きくなるにつれて力がますます強くなり、八歳か九歳になる頃には、とても力持ちになっていました。不思議なほど力を持っていた金太郎は、普通の子供とは違う遊び道具を持っていました。

彼は、いつも大きな斧で遊んでいて、普通の子なら怪我などをして危ないはずです。だが、金太郎は、斧の使い方をよく知っており、山姥は、斧を取り上げようとはしませんでした。金太郎は、毎日、大きな木を切り落として遊んでいました。

一人で遊ぶのは、金太郎にとってよいことではなかったのですが、こんな山奥に、遊ぶ相手が見つかりませんでした。山奥には、自分と母以外の人間はおらず、熊と鹿、兎と猿などの獣しかいませんでした。そこで、金太郎は、彼らを集めて自分の仲間たちにしました。そして、自分を頭としました。

金太郎は、とても強い力と度胸を持っていたので、彼らを自分の家来とし、自分を頭としたのです。熊は、動物たちの中で一番力が強かったので、自分の斧を持たせ、後ろに歩かせました。金太郎と仲間たちは、一つの場所にじっとせず、山を駆け巡って遊んでいました。

ある日、金太郎と動物たちは、山をうろうろして遊んでいると、平な草原にやってきました。辺り一面には、芝がじゅうたんのように張ってあり、金太郎は、相撲をやるのにちょうどよい所だと動物たちに言いました。すると、熊が、「それは楽しそうだ。僕たちが準備に取りか

かるから見ていてください」と言いました。

すると、金太郎は、重々しく「それじゃあ、早くやってもらおう。待っているよ」と熊に言いました。そして、熊は、今度は鹿と猿と兎に向かって、こう言いました。「これから相撲をするための準備をするのだ。皆も自分の役割を果たすように」と。

しばらくして、皆が作業を終わらせ、相撲をする場所の準備ができました。金太郎は、とても喜び、皆は、相撲を始めることにしました。金太郎は、勝ったものに賞品を分けると言い、動物たちは、とても喜びました。最初は、鹿が、審判を務めることになりました。決まりに従い、鹿は審判の服に着替え、戦いの時に使う扇子を手に持ちました。そして、勝った方に扇子を向けて上げるのです。最初に、猿と兎が相撲を取り、両者、一生懸命闘いました。そして、兎が勝ち、扇子が兎の方に向けられました。金太郎は、賞品を兎に渡しました。それは、ゆでた米を手で丸めたものでした。兎は、すぐにそれを食べ、猿は、悔しく思い、もう一度挑戦したいと思いました。そして、両者は、再び相撲を取り、今度は、猿が勝ち、賞品が渡されました。次に、鹿と兎が相撲を取りました。鹿は、背が高く、長い角を持っており、相撲を取るのにぎこちない体でした。そして、相撲が始まり、兎は背が小さいものの、賢いので、ついに、鹿を倒したのです。鹿は、賞品を手にすることができなかったのです。

これで四匹の獣たち全員が相撲を取り、やはり、熊が、一番強かったのです。これには、熊も誇らしげに思いました。たくさん遊んで疲れ果てたあげくに、また、明日やろうと思い、皆は、相撲を止めることにしました。

しかし、日は、まだ昇っており、もう少し皆で遊ぶことにしました。金太郎を先頭に、動物たちは山の中をさまよい、ある小川にやってきました。そこには、川を渡る橋がなく、水の流れもとても速いものでした。行き先を阻まれた動物たちは、あきらめようとしたその時、金太郎が、彼らを止め、近くに立っていた木を根っこから持ち上げ、川の上に投げて、橋を作ったのです。動物たちは、金太郎の怪力に驚き、まず、金太郎が渡り、その後、熊と鹿と兎と猿が順番に橋を渡って行ったのです。これを遠くから見ていた木こりは、金太郎の不思議な力にとても驚きました。彼は、きっと普通の子ではないと思い、どこまでもついていくことにしました。

金太郎は、誰かにつけられていることを知らず、動物たちと別れを告げ、家へと帰って行きました。山姥のもとへ行くと、「今日は、どこに行っていたの」と、聞かれました。すると、金太郎は、「山の奥で見つけた草原で相撲を取っていたよ。とても楽しかったから、興味深かったよ。明日も行くよ」と答えました。山姥は、誰が一番強かったかと聞くと、金太郎は、自分と言い張りました。そして、次に強いのが熊、あとの動物たちは同じくらいと言いました。二人は、楽しそうに相撲の話をしていると、突然、外から、「では、おじさんと相撲を取らないか」と声がしたのです。すると、そこには、怪しげなおじさんが現れました。こんな山奥に、人間はいないはずと思っていた金太郎と山姥は、驚きながら「誰だ」と尋ねました。しかし、おじさんは答えずに、金太郎と腕相撲を挑みました。二人とも力強い腕を出し、一生懸命戦ったのです。しかし、どちらにも軍配が上がらず、おじさんは、金太郎に不思議な力があると心の中で思い、こう言いました。「君の不思議な力には驚いたよ。山奥で木を倒して橋を作ったのを見て、君をこっそりつけて来たのだ。そして今、腕相撲で力試しをしてわかったことは、君が大人になったら、日本一強い男になれることだ。こんな山奥に住んでいることを非常に残念に思う。山姥、この子を侍に育てる意志はないのかね」と言いました。山姥は、「それは、とても嬉しいことです。しかし、彼は、とてもいたずら好きで、果たして侍になれるのでしょうか」と答えました。すると、おじさんは、「もし、山姥がよいのであれば、彼をとても名高い武将の源頼光に弟子入りさせてやりたいのです。実は、私は木こりではなく、武将の家来として日本中を周り、金太郎のような勇士を探しているのです。金太郎の将来は、とても明る

いと見ます。私の名は碓井貞光。もし、お望みなら、彼を源頼光のもとへ連れて行って弟子入りさせたいのです。よいでしょうか」と言いました。彼の本当の名を聞いた山姥は、とても満足し、喜びました。そして、「あなたが、貴族の方だとは知りませんでした。私の無礼な態度をどうかお許しください。金太郎をあなたに託します」と言いました。隣で会話を聞いていた金太郎は、都に行けることに大きく喜びました。

そして、相談は終わり、金太郎は、行く準備ができました。気丈な山姥は、寂しい思いを抑え、自分の息子が侍になれることに嬉しく思いました。しかし、熊と猿と兎は、最愛の頭がいなくなることを悲しく思い、去って行く金太郎を足柄山のふもとまでついて行きました。山姥は、「よい子でいるのよ。そして、碓井貞光様の命令に従いなさい」と言い、金太郎は、「勿論」と返しました。碓井貞光は、山姥に「どうか元気でいてください。よい知らせを近いうちに伝えに来ます」と言い、動物たちも「金太郎、頑張れー」と応援しました。そして、二人は、去って行ったのです。

金太郎は、碓井貞光に都まで連れて行かれ、とても幸せでした。そして、彼の紹介で武将の源頼光と出会いました。金太郎の足柄山での行動を聞いた源頼光は、とても喜びました。そして、金太郎を自分の家来とし、たくさんの褒美を与えました。金太郎は、坂田金時と名前を変え、その後、碓井貞光の四天王の一人になり、大江山の鬼を退治し、蜘蛛塚の蜘蛛の霊を倒し、英雄となったのです。

松山鏡

ずっとはるか昔、越後の国の松山に、ある夫婦が暮らしていました。二人には、とても愛らしい娘が一人しかいなくて、その子をとても愛していました。家族は、とても裕福で、幸せな生活を送っていました。

誰もが自分の友達に会うと嬉しいが、別れを告げる時は悲しいものです。娘は、親と暮らしている間は、こうして悲しみを感じませんでした。しかし、親と離れるのであれば、悲しいのは娘もそうでした。ある日、残念な知らせが家族のもとへ入ったのです。父が、仕事のために、越後から遠い京都へと行かなければならなくなったのです。

当時は現在と違い、列車もなく、疲れても人力車もなく、籠で行くことしかできませんでした。しかし、この乗り物は大変遅く、たいていの人は歩くほかなかったのです。さらに、現在のように、警察署も数が少なかったので、山道で泥棒に襲われ、殺されても不思議ではなかったのです。このようなわけで、旅人も、家に残る人も、大変な心配をしました。越後から京都までは一〇日かかり、今で言うと、アメリカまで行くのと同じくらいの感覚だったのです。

こういう状況だったので、母は、父が大事な仕事のために京都へ行くと聞いた時には、悲しくなって泣き崩れました。父は、母になるべく早く帰ってくるよう約束し、留守の間、娘の世話をすべて母にまかせることにしました。母は、これを聞いた時、困った顔をしながら泣きながらも、行っても構わないと言いました。そして、京都での仕事が終わったら、すぐ帰ってくるように、そして、体調に気を付けるよう言いました。娘も悲しそうな様子で見ていましたが、父が発たなければいけない理由の全貌を理解することができませんでした。父は、娘によい子でいたらお土産を持って帰ると言い、それに娘は、こう答えました。「私は、よい子にしているから、お父さんの帰りを楽しみにして待っています」。そして、準備が整ったら、父は、母と娘に別れを告げました。母と娘は、父の姿が見えなくなるまでずっと見送りました。

父が行ってしまうと、二人は家に入り、母は、娘がよい子でいたら、父は素敵な人形を持って帰ると約束しました。これを聞いた娘は、父の帰りを大変楽しみにして待っていました。

一ヶ月後、父は、京都での仕事がすべて終わり、急いで越後へ帰ってきたのです。長い旅にも疲れ、肌も焼けた父は家に着くと、「ただいま帰ってきたよ」と言いました。これを聞いた母は、とても喜び、「お

帰りなさい。私たちは、首を長くして、あなたの帰りを待っていました。無事に帰ってこられて何よりです」と嬉しい表情で言いました。そして、娘と母は、父の両側に駆けつけ、父の帰りを喜びました。父は、草履を脱ぎ、母が持ってきた水で足を洗いながら、側にいる娘に、こう言いました。「わしがいない間、よい子にしていたから、お土産を持って帰ってきたぞ」。父は、荷物からかわいらしい人形を取り出し、娘に渡しました。娘は、小さな手で人形を取り、ありがとうと言いました。母も、娘の側に来て「まあ、なんてかわいい人形かしら。見せてください。私も、それみたいなのがほしいですわ」と言いました。しかし、娘は、他のことを全く考えられずに、ずっと人形を見続けました。

そこで、父は、荷物から持って帰ってきた鏡を取り出し、母にやりました。しかし、母は、今まで鏡を見たことがなく、不思議に思いながら、こう言いました。「これは何のためですか」と。父は、「これは、鏡といって自分の姿を写すんだよ。男が、自分の刀を大事にするくらい、女は、これを大切に使うんだ。わしも、この村で見たことがなかったし、京都で、これを最初、見た時は珍しい物だと思ったよ。そこで使い方を理解したんだ」と説明しました。母は、鏡を開け、自分の姿が映っていることに大変びっくりしました。それから、それを人に見せることはしませんでした。少しすると、夕飯の準備ができ、家族は、一緒に食べました。

時はあっという間に過ぎ、娘は一五歳になり、両親は娘をとても愛していました。ある日、母が、風邪で倒れ、その後、体が、急速に衰えました。村で一番の医者に見てもらっても、体調が悪化し続け、皆が心配しました。娘は、とても親に優しかったので、大変、心配しながら、ずっと、母の隣で世話をしたり、薬をあげたりしていました。しかし、母は、これ以上、命がもたないと思い、娘をすぐ側まで呼びました。そして、娘の手を握りしめ少しの間見つめていましたが、こう言いました。「私の世話をしてくれてありがとう。でも、もう体調は、よくならない。私がいなくなった後は、お父さんの面倒を見てやってください。私を愛したように、お父さんも愛してやってちょうだい」。娘は、とても悲しくなり、涙ぐみ、「元気だして。お母さん。きっとよくなるから」と言いました。しかし、母は、「また元気になろうと頑張ったけれど、もう無理だと思います。一つあげる物があるの」と言い、小さな箱から、父からもらった鏡を取り出しました。「あなたも知っている通り、これはお父さんがくれた鏡よ。あの時以来、ずっと、あなたに見せなかったけれど、これからは、あなたが使いなさい。私が死んでからの思い出の物として受け取ってください。そして、私に会いたくなったら、この鏡の中を見てごらんなさい。そうしたら、私の顔が見えてくるわ。大切に持っておいてね」と、母は言いました。娘は、大変喜び、何度もありがとうと言いました。母の症状は悪化し、娘の看護のかいもなく、ついに亡くなってしまい、手厚く葬られました。

時は経ち、娘は、たびたび母のことを思い出し、寂しく泣いてばかりいました。ある時、娘は、母からもらった鏡のことを思い出し、言われた通り、その中をのぞいてみました。すると、そこには、思った以上に若い母の顔が映っていたのです。娘は、思わず、母に向かって、こういったのです。「ありがとう、お母さん、私が会いたいのがすぐわかって、姿を現したのね」。その日から娘は、毎日、朝も夜も鏡を使って母に会い、喜びました。

母が、亡くなってから一年が経ち、父は、新しい妻を娶りました。たいていの場合は、義母と娘は仲が悪いものですが、この二人は相性がよく、父も安心して、幸せな暮らしを過ごしていました。しかし、この幸せも長くは続きませんでした。娘は、何も変わらず義母に対し親切にしていましたが、義母は、ひどい態度を取り、父に娘の悪口を言い始めたのです。父は、義母の言うことを全部は信じず、娘をさらに愛しました。そして、ある日、義母は、父に、こうお願いしたのです。「どうか私にお暇をいただきたい。家に帰らせてください」。驚いた父は、理由を聞きました。義母は、「私が、これ以上、この家にいた

ら、命が危ないのです。娘は、神に祈願して私の命を奪おうとしているのです」と答えました。それでも娘は、とてもよい子なので、父は、信じようとはしませんでした。父は、娘が悪事をしようとしているのか確かめようと考え始めました。娘は、いつも親に優しいのに対して、義母が、娘に無慈悲な態度を取るため、亡くなった実の母のことを思い出させていました。娘は、常に自分の部屋に引きこもり、自分の実の母の顔を見るために、ずっと鏡を見つめていました。

そして、ある日、父は、こっそり娘の部屋に入ると、娘は、じっと鏡を見つめながら、このことばかり考えていました。父は、これを見てびっくりし、「何をしているのだ」と問いました。すると、娘は、素早く鏡を服の中に隠し、何も言いませんでした。これに父は怒り、真剣に叱って、こう言いました。「おまえは、一体、なぜ義母に悪いことをしようとするのだ。いつも、よい子でいるようにとお父さんは言っているじゃないか。それでもおまえは言うことを聞かない。悪い子だ」と怒鳴ったのです。すると、娘は、隠し事をするのはよくないと思い、服の中にあった鏡を取り出し、父に見せました。しかし、父は、「これはおまえのお母さんにやった京都から持って帰ってきた鏡だね。なぜ、おまえは、いつもこの鏡を見つめるのだ」と聞きました。娘は、亡くなった母から聞いた話を父に説明しました。しかし、父は、この鏡に母の魂が映るわけがないと言いました。娘は、鏡に映る自分の顔を見て、こう言いました。「ほら、お父さん、見て。ここにいるでしょ」。すると、父は、こう答えました。「おー、なるほど。おまえは、その映っている顔をお母さんの顔だと勘違いしていたのか。おまえの顔は、お母さんに似ているからな。お母さんに対する愛情が深いことをほめてやろう。怒ってすまなかった」。父は、涙をこぼしながら、そう言いました。この会話を聞いていた義母は、突如、部屋に入って来て、こう言いました。「これほど愛情の深い娘を嫌ってしまって、ごめんなさい。どうかお許しください。これからは、たくさん愛情を持って、自分の娘のように思いましょう」。これを聞いた父は、喜びました。その後、三人は、心配事も争い事もなく幸せな生活を送ったのでした。

四、おわりに

松室八千三版『昔噺』については、これまで、前掲した京都外国語大学の『文明開化期のちりめん本と浮世絵』[8]に、「巌谷小波の『日本昔噺』の文章を英訳したような内容」との指摘が既にある。拙稿[9]でも触れたが、巌谷小波は、明治二七年（一八九四）～明治二九年（一八九六）、博文館から日本語の『日本昔噺』二四編を刊行した。この『日本昔噺』は、松室八千三版が出版された後の明治三六年（一九〇三）・明治三七年（一九〇四）、英字新報社から『和英対訳日本昔噺』として出版される。松室八千三版『昔噺』と巌谷小波の『日本昔噺』（博文館）は、ストーリー展開や登場人物の名前など、一致している箇所が多い。それに対して、長谷川版のちりめん本『日本昔噺』にある「浦島」や「舌切雀」、「猿蟹合戦」、「松山鏡」では、ストーリー展開が異なっているのである。以上から、松室八千三は、長谷川版を意識しつつも、巌谷小波の『日本昔噺』二四編の中から一〇話の昔話を選んだ上で、松室八千三版『昔噺』を作成したと指摘できよう。

しかしながら、松室八千三版は、巌谷小波の『日本昔噺』を単に英文にしたわけではない。松室八千三版独自の部分も見受けられる。例えば、「昔噺勝々山」の冒頭では、「昔々、ある所に、おじいさんとおばあさんが、一緒に暮らしていました。二人は、とても正直で、穏やかな人たちでした。世の中によい人だけがいればよいのですが、とても悪い人たちもいます。そして、この傾向は、男性と女性に限らず、動物たちにも現れるのです」と記されている。さらに、「昔噺花咲爺」の花咲爺が花を咲かせる場面の直前には、「人はよいことをすれば、よい償いが返ってくるのです。そして、悪いことをすれば、悪い償いが返ってくるのです」とある。加えて、同じく「昔噺花咲爺」の最後では、「これは、善と悪とを対照した話です。横しまな心の人には、ひど

い報いがあり、善良で正直な人には褒美があるということです」と述べている。このように、松室八千三版『昔噺』は、善悪を強調する英文になっているのである。さらに、「浦島太郎」では、「亀は、荒波を越えて竜宮へと泳ぎました。何マイルも進んでいくと、とても立派な門が見えてきました」とあり、「マイル」という表現が使われている。巌谷小波の『日本昔噺』には、距離を表す表現は見受けられない。「松山鏡」では、京都に向かう父のことを「越後から京都までは一〇日かかり、今で言うと、アメリカまで行くのと同じくらいの感覚だったのです」と記されている。巌谷小波の『日本昔噺』では、「アメリカ」とはせず、「洋行する」になっている。このことから、松室八千三版『昔噺』は、ターゲットを欧米人に絞った輸出向けのちりめん本であったと言えよう。

次に、松室八千三版『昔噺』の英文の特色と、松室八千三版『昔噺』のその後の展開について触れておく。前述したが、松室八千三版『昔噺』は、日本人の林弘之が英文を作成している。そのため、日本人が発想する英文になっている。林弘之は、英文の構造の作り方はわかっているものの、英文を形容する言葉が肌でつかめていない。単語を辞書で引いて、当てはめている。さらに、本来は過去形のところを現在形にしている箇所が見受けられる。英文の場合、普通は文章がそれほど飛ばず、主語を変えずに、きめ細かく綴っていく。また、「and」や「but」を多用しない。しかし、林弘之は、逆接でもないのに「but」でつなぐ傾向がある。そのため、英文としてはきつい表現と受け取られがちになる。つまり、松室八千三版『昔噺』が刊行された明治三三年（一九〇〇）当時、林弘之は、英文のニュアンスがわかるレベルに達しておらず、それがぎこちなさの原因になっている。この時、松室八千三が外国人を雇い、チェックすれば、自然な文体になり、スペルなどの間違いが起きなかった。しかし、松室八千三は、あえてそれをしなかった。そこに、松室八千三の日本人だけで、ちりめん本を作ってやろうという意気込みが感じられるのではないか。松室八千三のチャレンジ精神と、それに応えた林弘之の努力は、相当なものと言えよう。林弘之の文法は、決して大きく間違っているわけではない。外国人の目を通さなくても、林弘之の英文全体のペースは淡々としており、欧米人は、ストーリーを充分に理解し、内容をおもしろいと感じたと推測できる。

残念なことに、松室八千三版『昔噺』は、明治三三年（一九〇〇）に一度、出版されただけで、ちりめん本として重版されることはなかった。おそらく、ちりめん本としての需要が見込めなかったのであろう。その後、松室八千三版『昔噺』は、発売所だった石塚猪男蔵（いしづかおぞう）に引き継がれ、洋装本となり、日本人向けの英語のテキストとして受け継がれていく。石塚猪男蔵は、『昔噺』の内容を別の形で再生させたのである。その理由として考えられるのは、昔話が日本人にはなじみやすく、林弘之の英文は「会話文」が多いため、英会話のレッスンや英語習得の教材として使用するには適切だったことが挙げられる。拙稿[10]でも述べたが、まず、石塚猪男蔵と林弘之は、明治三六年（一九〇三）五月二二日に、松室版『昔噺』の中の一つ「昔噺瘤取」に、日本人向けの註や例文を付け、『THE STORY OF KOBUTORI』として発行する。大きさは、縦一八・三センチ、横一二・二センチである。この所蔵先は、同志社大学図書館蔵本でしか確認が取れないため、松室八千三版『昔噺』がすべて分冊の形で出版されたのかどうかは現段階では不明である。

次に、石塚猪男蔵と林弘之は、松室版『昔噺』を合本にし、目次を付け、それぞれの昔話に註と例文を施した洋装本『英文日本昔噺』（THE STORY OF NIPPON）を刊行する。「浦島太郎」の例文には、「can you take me to Tennoji？君ハ天王寺へ連レテ行キ得ルヤ」があり、関西、特に大阪で英語を学ぶ読者に向けて発信されたことがうかがえる。また、出版に際し、大幅なタイトルの見直しをおこなっている。目次と一致しない場合もあるが、日本人にわかりやすいように、タイトルの中にローマ字を導入しているのである。例えば、「昔噺舌切雀」は、「THE

OLD STORY OF SHITAKIRI SUZUME」となっている。この洋装本『英文日本昔噺』は、明治四一年（一九〇八）二月一〇日に再版、同六月一〇日に三版が出版されている。再版・三版とも、大きさは、縦一九・三センチ、横一三・〇センチである。再版から三版に改訂するにあたり、スペルの訂正は行っているが、註や例文の訂正はない。現段階で確認できる所蔵先は、再版が大阪府立中央図書館国際児童文学館、梅花女子大学、関西大学図書館、神戸市立中央図書館、三版が大阪府立中央図書館国際児童文学館、国際交流基金情報センター、京都産業大学図書館、架蔵である。注目すべきは、大阪府立中央図書館国際児童文学館蔵本の再版と架蔵の三版には、外箱が付いており、林弘之が、明治四一年（一九〇八）当時、刊行していた英語のテキストの広告が載せられている。再版と三版の外箱は、再版に爪掛け穴がある以外は同一である。これらの再版・三版は、当時の日本人に非常に愛されたテキストであった。英語のスペルのミスは、直っていない箇所が、頻繁に見受けられるが、それが逆に読者の勉学意欲をかきたてた。再版・三版には、スペルのミスを読者が訂正したものが多く見受けられるからである。当時の日本人にとって、洋装本『英文日本昔噺』は、全く英語を知らない日本人には、充分に通用するものであったのである。

前述したように、長谷川武次郎は、当初、日本人の英語教育をもくろんでいた。しかし、それをすぐに取り止め、ちりめん本を外国人のお土産として輸出し続けていった。松室八千三版は、一度の試みではあったが、その意思を受け継いだ石塚猪男蔵と、訳者の林弘之によって、これから羽ばたこうとする商業都市大阪でターゲットを日本人に切り替えた。このように、ちりめん本は、東京と大阪では全く違った使われ方をしているのである。長谷川武次郎は、じっくりと時間をかけ、東京で、東京の浮世絵師を採用し、外国人に英文を任せた。松室八千三は、同じちりめん本を刊行したが、あくまでも大阪にこだわった。挿絵も英文も大阪在住者に担当させたのである。驚くべきことは、松室八千三版『日本昔噺』一〇冊は、一ヶ月間未満で発行されている。この素早さが、松室八千三版の最大の評価につながるだろう。ある意味、松室八千三版『日本昔噺』は、明治期における出版業界の動向の象徴とも言えよう。

本稿では、これまで、あまり顧みられなかった松室八千三版『昔噺』の翻訳をおこなった。本稿により、長谷川武次郎（長谷川弘文社）版以外のちりめん本研究の今後の研究が待たれてやまない。

註

（1）石澤小枝子『明治の欧文挿絵本ちりめん本のすべて』（三弥井書店　平成一六年三月）

（2）宮尾與男編『明治期の彩色縮緬絵本対訳日本昔噺集』全三巻（彩流社　平成二一年二月～五月）

（3）中野幸一「上方版チリメン本の日本昔噺」（『日本古書通信』八〇二号　日本古書通信社　平成八年五月）二～四頁

（4）石澤小枝子『明治の欧文挿絵本ちりめん本のすべて』（三弥井書店　平成一六年三月）一〇・一一頁

（5）『二〇〇七学校法人京都外国語大学創立六〇周年記念稀覯書展示会　文明開化期のちりめん本と浮世絵』（京都外国語大学付属図書館・京都外国語短期大学付属図書館　平成一九年五月）五頁。なお、本書では、松室八千三版『日本昔噺』一〇冊の表紙のカラー図版や解説、書誌を掲載している。

（6）石澤小枝子『明治の欧文挿絵本ちりめん本のすべて』（三弥井書店　平成一六年三月）一六・一七頁

（7）榎本千賀「ちりめん本研究―松室八千三版『昔噺』と石塚猪男蔵『英文日本昔噺』が生まれた背景―」（『昔話―研究と資料―』三八号　日本昔話学会　平成二二年三月）

（8）前掲（5）を参照

（9）前掲（7）を参照

（10）前掲（7）を参照

［付記］
本稿をなすにあたり、松室八千三版『昔噺』の翻訳にあたっては、ティモシー・マクサマック氏と平野敏子氏のお力を借りた。また、加藤康子氏、石川了氏、木戸雄一氏、ティモシー・マクサマック氏、平野敏子氏には、様々なご教示を賜った。ここに記して、厚く御礼申し上げる。